

正・政・清・聖・性・酔

炉ばたセイ談



平成23年秋号

巻頭言

なびしうよテイ「サン

渋谷 繁樹

あなたアツサリ退場 手も振らず「サヨナラグッバイ」 中国なら
「また会おう」 フランスでは「いい航海を」 スペインじゃ「神と
行け」 つあいちえん ぼおんぼおやあじ ばいあこんでいおす
いろいろそれぞれ別れの文句 全部似合うアナタの背中 信州東京
入来に地球 どこにいたってオヒメサマ なにをしようがみんな
得心 アノネエエ おっとりゆるやかミヤビヤカ 落花世の常
わかるけど なびしうよテイ「サン

目次

一 弔辞

経済産業副大臣・衆議院議員・松下 忠洋	1
薩摩川内市市長・岩切 秀雄	1
炬ばたセイ談会長・桐野 三郎	3
鹿児島県日中友好協会会長・海江田順三郎	5
華短歌会前代表・川涯 利雄	7
友人代表・岩元 忠雄	9

二 貞子さんを偲んで

三月十一日（喪失）・入来院重朝	11
入来院貞子さんを偲んで・銚之原 昌	17
亡き貞子様を偲んで・江藤ヤエ子	20
てい子さんのこと・田原真里子	22
故入来院貞子さんと薪能・下土橋 渡	23
拝啓 入来院貞子様・岩崎 好江	28
オヒイサマの電子郵便・渋谷 繁樹	30

三 故入来院貞子さん関連資料

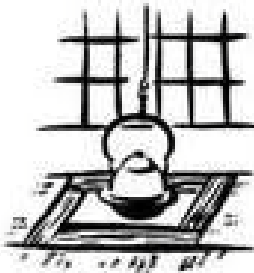
励ましの言葉に寄せて（随筆かごしま No. 185）	33
五年ぶり山城に幽玄美 第七回入来院薪能（風姿5号）	36
故入来院貞子さんのプロフィール	38
入来院貞子作品リスト	39

四 主義主張、エッセイ、旅行記

生体解剖事件	百田 陽一	43
インサイド・ジョブ	百田 陽一	47
時の過ぎ行くままに	桐野 三郎	49
獅子島・長島の旅	江藤 ヤエ子	56
式年遷宮に見る「共生と循環」	宮下 亮善	60
戦中派世代の生き方を考える	中西 喜彦	63
貞子さんとコンピュータ	下土橋 渡	71
陶工の仕事	十五代 沈壽官	76
夢は叶うもの 思い強ければ	岩崎 好江	78
編集後記	事務局	80

表紙 マウスアート アマリリス

(故入院貞子さんの依頼により平成18年6月下土橋制作)





国の史跡 清色城跡の春

一、弔辞

弔（電）辞

経済産業副大臣

衆議院議員 松下 忠洋



ご令室様の訃報に接し言葉にならない悲しみに襲われています。

ご令室様は入来花水木会代表として昨年七回目を数えた「入来薪能」の開催、同人誌「火の鳥」などへのご執筆、お父様が創建された「世界平和同願会・昭和寺」での活動など、ご主人様ともども地域文化の振興、町おこし、さらには世界平和へのご貢献など、まさに入来、鹿児島をリードする、私たちにとつてかけがえのないご存在だっただけに、悔やんでも悔やみきれない思いです。

近年大きな病を克服され、これから一層のご活躍が期待されていただけに、ご遺族の皆様のお気持ちを押察するに胸が痛みます。東日本大震災被災者支援のため遠方におり、駆けつけることができませんが、ありし日のお姿を偲び心より故人のご冥福をお祈り申し上げます。

弔辞

薩摩川内市市長 岩切 秀雄

故入来院貞子氏は平成六年、夫入来院重朝氏の故郷である入来の地に移住してこられました。以来十六年余、我が故郷としてこの地をこよなく愛され、その人柄や教養の深さを持つて「薪能」による地域おこしに尽力され、地域の人々のために心血を注いでこられました。

た。その貞子氏が、入来の発展に欠かすことのできない逸材であったことは皆様の周知するところであり、改めて私が言明するまでもございません。

近年は、闘病生活の果てみごとガンを克服され、さらに活躍の場を広げようとされていた矢先でのご不幸であったと聞き及んでおり、貞子氏を敬愛していた者の一人として、衷心より哀悼の意を表します。

さて、入来薪能の歴史を紐解きますと、貞子氏が入来に入られた年が、奇しくも祖先一族である渋谷氏の、関東下向七五〇年の節目であったことに端を発します。貞子氏は、これを機に、伝統的な中世の街並みが現存する入来の地で「薪能」をぜひとも実現させたいと切望され、県内外の文化人に広く呼びかけられました。また、地域においても町おこしグループ「入来花木水会」を発足させ、夫の

重朝氏と二人三脚で企画運営の中核を担ってこられました。平成十一年に「第一回入来薪能」を開催以来、「静寂な闇夜に揺れる美しき幽玄の世界」を現代に蘇らせるという壮大な試みを六回にわたって成功に導いてこられました。一方で、「入来文書」の訳者でもある横浜市立大学名誉教授矢吹晋先生の講演会の実現も成し遂げられました。

ご存知の方も多々いらっしゃるかと存じますが、入来文書は福島県二本松市出身の朝河貫一博士が、鹿児島県の旧家入来院家とその一族に伝えられた古文書を研究して、昭和四年に英文で発表した論文でございます。これは、一つの地に六〇〇年も領主であり続けてきた入来院氏一族を解析することで日本の封建時代の成り立ちを説明した世界的な文献とも評されております。その後、この論文は前述した矢吹晋教授により邦訳されましたが、

貞子氏はこれを独自に調査研究され、昨年十二月に発行された「火の鳥二〇号」に「貞子が語る入来文書」と題してその成果を発表されておられます。西欧における日本研究に不可欠とも言われる朝河貫一博士の研究内容を知る上で、大変わかりやすい文章との定評があり、情熱のこもった数々の功績にただただ頭の下がる思いであります。

このほか、貞子氏は県下の中高校生の文化的向上にも目を注がれ、県歌人協会と連携して「まごころ青春短歌会」も立ちあげられ、徐々にその根も定着しつつあります。

今後とも、貞子氏のご遺志を関係者の皆様方に宮々と受け継いでいただき、奥深い日本文化の神髄を探究していただくとともに、引き続き、地域発展の主翼を担っていただければと切望するものでございます。

本市といたしましても、貞子氏のご功績を

無にすることなく、関係各位のご協力を賜りながら、「歴史の町」、「入来文書の里」としての入来を全国に向け、積極的に発信してまいりる所存であることをお伝え申し上げ、結びといたします。

弔辞



炬ばたセイ談

会長 桐野 三郎

貞子さん、元氣な貴女にお会いしたのは三週間ちよつと前、まだひと月も経っていません。四月のペンシルクラブの例会でした。その日の講師は貴女と同じ「火の鳥」の同人杉山武子さん。さすがに貴女のお仲間だけあってすばらしいお話でした。

あの日の別れしな、貴女と話したのは私たちの会誌「炬ばたセイ談」7号の発刊についてでした。そして編集長の貴女から全會員に連絡が届いたのがほんの十日ほど前。それなのに今日、いま、こうして貴女の葬儀に参列し、貴女の遺影を前に弔辞を読まなければならないとは――。

正直に言つて私にはまだ信じられないのです。あるのはただ驚きばかりで悲しみに浸る余裕すら湧いて来ないといつてもいいぐらゐの状態であります。

私の目に触れた最後の貴女の記事は「随筆かごしま」一八五号の「山北の便り(59) 励まし言葉に寄せて」でした。

「今日はいい励ましの言葉が載っていた」朝食を済ませて炬燵に座ると夫が言った。

という文章で始まる貴女らしい暖かいぬくもりの伝わってくる東日本大震災にまつわ

るエッセイでした。そして結びはこうです。

そうだ。間もなく復興の植音が響きわたり、活気のある日本が戻ってくるにちがいない。私は日本の底力が世界をリードする日も遠くないだろうと信じている。

しかも、この随筆かごしまが発売されたのもほんの十日ほど前です。こんな希望に満ちた文章を残して、貴女がこんなにも突然に彼岸に旅立たれようとは――。

しかしながら、こんなことを申し上げたら、ご遺族のお気持ちに添わないかもしれません。あえて一友人として言わせていただけるなら、長野県に生まれ、愛する家族に看取られながら入来武家屋敷の茅門邸で七十八年の生涯を閉じた入来院貞子の人生は「存分に自分の人生を生き切った」みごとに終止符で閉じられたようにも思われてくるのであります。最後まで貞子流を貫き通すとでもいうように。

弔辞を読むという責をはたすためには歴史家、文筆家としてももとより、薪金や短歌など、貴女が果たした文化的業績にも触れなければならぬのでしようがそれにはより適任のかたがおいでと存じますので、そちらにお譲り申し上げ、私はただただ入来院ご夫妻に知遇を得た幸運に感謝申し上げて弔辞といたします。

最後に唯ひとつ。貞子さんの心残り是最愛の夫、重朝氏の落胆ぶりでございますが、そこは及ばずながら私も友人のひとりとして、茅門邸の囲炉裏ばたで焼酎でも酌み交わしながら叱咤激励してまいる所存でございますので、貞子さん、どうぞ心安らかにお眠りください。

(平成二十三年五月五日)



弔辞

鹿児島県日中友好協会

会長 海江田順二郎



「入来院貞子様が亡くなられたそうです」
鹿児島市日中友好協会の大石副会長からの電話に私は一瞬耳を疑いました。つい数日前の日中友好協会総会にご夫婦で元気なお姿を見せられたばかりなのに、そんなことがある筈がないと言いかけてましたが、ご自宅での転倒が元で脳の障害を起こされての急死と知り、言葉を失いました。

貞子様にはご実家、信州霧ヶ峰昭和寺が主宰される「世界平和同願会」の運動にご夫君共々熱心にたずさわってこられました。一方アジアの平和の基礎となる日中関係にも強

い関心を持たれ鹿児島市日中友好協会の常任理事として、その運営に積極的に関わってこられました。特に今年度は協会の女性部会長として、文化活動を通して日中の相互理解と関係改善に意欲を燃やされ、私共も大いに活躍を期待いたしていた矢先のご逝去でありました。

貞子様は鹿児島市日中だけでなく鹿児島県日中友好協会にも協力され、総会の記念講演の講師に中国経済を専門とされ、中国に関する評論家としても名高い、矢吹晋先生に二度に亘って招請して頂きました。福島県出身の矢吹先生は郷里の大先輩に当たられる朝河貫一文学博士の顕彰会代表理事も務めておられますが、この朝河貫一博士こそ米国のイエール大学の教授在任中に「入来文書」を英文で世界の学界に紹介され、日本の封建制度の実態が始めて資料的に認知されました。

矢吹先生が英文の入来文書を日本語に翻訳して出版されてから貞子様には入来文書の原籍地である入来町で矢吹先生の「朝河貫一博士と入来文書」に関する講演会を何回となく開催され、鹿児島県内外の歴史学者や研究家が入来院家ゆかりの入来町に多数参集して話題を呼びました。

貞子様は文筆家としても知られ、鹿児島の郷土雑誌「随筆かごしま」に毎号軽妙な筆致で機智に富んだエッセイを寄稿してこられました。先月二十五日発行の最新版にも「励ましの言葉に寄せて」と題して「東日本大震災から復興した日本が再びその底力で世界をリードする日を信じている」との名文を遺しておられます。

私は昨夜、貞様様が女流作家の同人誌「火の鳥」に寄稿された「連理の星霜」を読み返しました。貞様のお父上、山崎良順和上が

その恩師渡辺海旭師との因縁で連なる東京新宿の老舗中村屋を創業した相馬愛蔵とその妻、良との波乱にみちた生涯を、人物評伝の白眉とも称すべき名文で綴られました。が、あとがきの末尾に筆者夫妻も愛蔵と妻良が「連理比翼」の深い夫婦の契で結ばれていたように終りたいと結んでおられます。

このたび俄にお浄土へ旅立たれた貞子様には恐らく佛の國からお一人遺されたご夫君重朝様を温かくお見守り下さるものと信じて已みません。貞子さまにはご主人様同様に日中友好協会の私共も影ながらお導き頂きますようお願い申し上げます。合掌（平成二十三年五月五日）



弔辞

華短歌会

前代表 川涯利雄



貞子さん あなたを喪つて残念無念です。あなたは歴史研究家として、作家として大きな才能をお持ちでした。

同人誌「火の鳥」第二十号の「貞子が語る 入来文書」はみごとに作品ですネ。語るような自然な文体で朝河貫一博士の労作「入来文書」の世界を解いてゆかれる手腕、情熱に言葉もありません。

あなたはその歴史研究に向ける情熱と同じ熱情を町興しに向けられました。月餅を作り薪能を主催し、まごころ青春短歌大会に全力を注いで下さいました。自分の損得など全

く眼中にありませんでした。

まるで乙女のような澄んだ魂を込めて、人のために取りくんで下さいました。日本一流の方々と交わり、一流の学識をもち、八百年の歴史を持つ入来院家の嫁でありながら、あなたはちつとも偉ぶらず威張らず自然体で人を温かく迎えて下さいました。最も良質の美しい日本のご婦人、真の大和なでしこでした。

あなたは癌にちつともたじろぎませんでしたネ。抗癌剤で髪の毛を抜けた頭を私どもに見せて笑っておられました。あの落ちつき、静かな心はどこから来るのか、私にはまだわかりません。立派な生き方でした。この人は癌を克服すると私は確信しました。その通り、あなたには豊かな髪がかえり、美しい微笑が帰ってきました。

そして復活しながら、今回突然逝ってしまわれたのは何か？

あなたの親しい人々が皆とまどつています。

今となって、何を言ってももう間に合いません。しかし、一つだけ重朝さんが、呑みすぎる時は膝をついて「あなた・・・」とたしなめて下さい。元気を回復して、これからも私どものよき指導者として、力をふるって下さるよう、お守り下さい。私どもがあなたのようなみごとな人間として成長できますよう、見守って下さい。(平成二十二年五月五日)



弔辞



友人代表

岩元 忠雄

貞子さんの余りにも突然の悲報に取るものも取り敢えず大阪から駆けつけて参りました。往生の素懐を遂げられた貞子さんの前に様々な思いが蘇って参ります。

その第一番が入来院重朝君との出会いです。昭和二十一年四月終戦の翌年我々は旧制川内中学校に入学第一学年の同クラスが彼との縁の始まりでした。

或る日突然僕に殴り掛かって来たクラスの生徒が居りました。後のヘルシンキオリンピックの選手として出場した友達ですが、その時「ナイオスツトカ！」と中に割って入り僕

を庇ってくれたのが入来院君でした。爾来六十五年のお付き合いです。

当時彼は武の方にも長けておりましたが、文の道では特に秀でており、我々仲間の尊崇の念を一身に集めておりました。文学に於いて、又美術の面でも素晴らしい素養の持主でした。

そして十年後、貞子さん 貴女との遭遇です。昭和三十一年三月十一日、丁度今年の日東日本大震災が襲ってきました。入来院君謂く、その日が第五十六回目の結婚記念日だったと・・・。

つまり五十六年前のその日、入来院君と貴女も早稲田大学の学生でした。新宿のさる小さな料理店の小さな部屋に向き合って、お二人が結婚を宣言されました。「お前が只一人の立会人だよ」と。あのおりの本当に初々しい、又こぼれる程の幸せに満ちた貴女が思いださ

れます。

其の後、矢張り印象深いのは入来に帰鹿されてからのご活躍ぶりです。特に文筆活動では、この春送って頂いた「火の鳥」の「貞子の語る入来文書」大変力作ですが之が絶筆です。薪能の招致、短歌の会等々その優れた又幅広い文芸活動は誰もが知る所です。

只、我々仲間が尊敬する入来院君が一番心の頼りにし心底敬愛し続けて来たのが、貞子さん貴女です。七十八歳の未だ惜しまれる年齢ですが、信ずる道を躊躇なく進み、やりたいた事を遣り、自分の人生を存分に生きてこられた様に思われます。本当に素晴らしい人生でしたネ。

此れからは入来院君を、又、お子様達の未來をお導きください。貞子さんのご遺徳を偲び哀悼の意を表し、私の弔辞といたします。

(平成二十三年五月五日)



庶流入来院家茅葺門

二、貞子さんを偲んで

三月十一日（喪失）



入来院重朝

三月十一日朝食時に妻貞子がぼくに云いました。今日は私達の五十六回の結婚記念日よと。そうか五十六年たったのかと私は思い、貞子に云いました。よし八十回を目指そうと。貞子は笑っていました。

昭和三十一年三月十一日、私と貞子は、貞子の叔母菊池ご夫妻のご媒酌により、東京原宿の東郷神社で両家の両親、ごく近い親族として私の親友一人、貞子の親友一人に囲まれて式を挙げました。貞子と知り合って、半年

もたっていませんでした。私が二十五歳、貞子が二十三歳の春でした。未だ先のことなど全く何の見通しもない大学の学生同士でした。両家の両親がよく承知してくれたものだと、今思います。私は記憶力が弱く、当時どのよう運んだのか、全くと云っていいほど思い出せません。貞子がいれば、即座にあの時はこうだったのよと教えてくれたでしょう。

私は少年時十三歳、小学校六年生卒業を控えた昭和十九年、紀元節二月十一日の朝、急性左肺結核性助膜炎を発病し、以後右肺に転じ、続いて腹膜炎と続き、十九年夏に耳元で医師であった父が呼んだ医師との会話で、自分が危篤状態であることを覚っていました。人は生死の境の中でも知覚は働いていることを私は体験したのです。それから私の両親は、いわゆる民間療法を私にためすべく、効くと称する薬草を郷里の鹿児島にも求め、私に施

しました。その具体的内容はここでは省きませんが、その効果は実に素晴らしく、秋口には

私は回復したのでした。父が黙って私の痩せこけた体を自ら浴槽で洗ってくれた手ざわりを今思い出しますと、涙が湧いてきます。こうして私は一命を取り留め、秋色が濃くなつた頃京城の冬は寒く、病後には堪えるということ、私は内地への転地療法が必要との診断で、父の故郷である鹿児島へ一冬越す為に朝鮮を離れました。一冬越し祖母の温顔に別れを告げ、京城の我が家に戻りましたが、丁度連翹（れんぎょう）の黄色の花が一斉に咲き京城の街路は春色一色でした。こうして私の健康は徐々に回復し、私は一人で毎日のように釣具を抱え電車に乗り、漢江の川辺へ魚釣りに出かけました。一人で釣り糸を垂れ川の流れの中の浮きを見つめながら何を思っていたのか全く思いだせません。要するに少年

の首途で味わった挫折を私なりに噛み締めていたのです。

二十年夏。さんさんと降る陽光の昼。近所のご主人が鉄道の高級技師を務めておられた奥さんの家の蓄電兼用のすてきなラジオから流れてくる玉音放送を聞いていました。

奥さんの顔色から日本は負けたのだなど覚りました。奥さんがこの時こう云ったのです。坊ちゃん、アメリカは原子爆弾を落とす。無辜の民を平気で何十万も殺す国です。何れこの口惜しさを晴らさなければなりません。坊ちゃん、絶対このことを忘れないでねと。奥さんの目から涙があふれてきました。

十月には確か父の郷里入来にそれぞれ身一つで一家は引揚げてきました。つまり敗戦国の引揚げ者となったのです。翌年、私は旧制川内中学校一年生として入学を許可されました。つまり同年齢より一学年遅れたのです。

同年夏だったか翌年二十二年夏だったか、今確かではありませんが、昭和天皇が全国行脚の一齣として鹿児島へも来られ、途次川内へ降りられ、川内中学校の校庭の粗末な壇上へあがられました。校庭を埋め尽くした生徒他、近所総勢市民が多数来ていました。

天皇陛下が何とおっしゃったか全く分かりませんが、しんと静まり返った中での玉音でした。敗戦に至ったことも天皇としての思いをおそらく済まなかったと国民への贖罪の旅での玉音を私の中で聞きました。

私は突然、泪があふれ出し止まりませんでした。天皇が中折れ帽子を振って壇を降りられ自然解散となり、私も帰途につきましたが、一向にあふれる涙が止まりませんでした。歩きながら駅に向かいましたが、周りを見ると皆は普段通りで歩いていました。何故私に、

深い感動が襲ったのか今も分かりません。ただ泪は止めどなく湧いてくるものだと言うことを体験しました。

敗戦国の現実つまり、一切占領軍の命令に服従するのみということ。その現れは直ちに私の眼前にさらされました。ある日近所の小学校の校庭下の馬場に家中所蔵の刀剣甲冑のたぐいが山と積まれたのです。かくの如く一枚のフレで日本人は一斉に服すのでした。

私は以前にも書きましたが、マッカーサーGHQの様々な日本国解体の命令の中での具体的体験は直接我が学業に関するいわゆる学制改革でした。旧制の否定です。私は日本国の無能に等しい柔順さに絶望し、二度目の深い挫折を味わいました。以来私の人生は無明のままでした。つまり私は生きるべく生きていなかった。人生への目標を失ったのです。

私が無明のまままで自儘に或る絵描き志望

の一人の親友と東京で毎日過ごしていた当時、昭和三十年の秋、私は突如下宿を移ろうと思いい、学協の紹介で行った先に、今まさにその下宿を引き払おうとしていた貞子に会ったのです。初対面の挨拶を交わして、貞子は新しい下宿先に移っていったのでしたが、それ以来貞子は、ちよくちよく私の新しい下宿先、貞子にとつては旧下宿に立ち寄ることになったのです。私は云いたいことを云い、貞子は私の云うことに反対もせず、黙って笑っていました。

その年の暮れ私は貞子に便箋一冊に私の思いを書き綴り送っていたことを貞子の死後確認しました。貞子の急死により、彼女の生前の身边、特に必要書類確認のため彼女専用愛用の筆筒等を調査しましたら、深い筐底よりその便箋一冊が見つかったのです。便箋は相当ヨレヨレ色もあせていました。貞子が黙

って五十七年近く持ち続けていてくれたことを知って、私は泪があふれてくるのをどうしようもありませんでした。

私は貞子の無償の愛の一鞭によつて私の人生に明かりが灯ったのです。私は天上の神に感謝せざるを得ません。

こうして私の人生は始まりました。そして私の人生は五十六年間であったと覚つたのです。貞子に救われたことの証である、東郷神社での結婚奉式の古ぼけた写真を一人取りだして見ていると泪があふれて止まりません。私の愚かさは貞子が亡くなってから、そのことを覚つたことからでも明らかです。

つまり私の人生はずっと無明ではなかったのか、私の人生は貞子との五十六年間であったと私が覚つたことも、実は無明の証ではないのか。私は貞子を失い、私の人生の喪失の思いをぬぐい去ることが出来ません。私は

貞子を思うと涙が湧いて止まらなくなり、ますます明るい陽光のもとでの天皇の玉姿に打たれて、ただ訳もなく涙があふれた時の泪とどう違うのか、全く私には分かりません。

貞子が亡くなったのは五月二日午前十一時二十四分でした。前日正午頃、我が家の勝手出入口での転倒による頭部打撲急性硬膜下血腫、脳挫傷との診断で手術も虚しく亡くなりました。実にあつけない出来ごとでした。

私は当日所用があつて小一時間ばかり外出していました。正午過ぎ家に帰ってみると貞子が勝手口石段下でうずくまっています。どうしたと声をかけても無言でした。早速救急車を呼び、抱き起こそうとすると貞子が、トイレに行きたいと二度しつかりした口調で私に申しました。オウ、行こうと抱き起こし救急車乗務員の手を借りながら家中のトイレで用を済まし、良かったナと声をかけ貞

子はうなずきました。

それが最後の貞子との会話になりました。貞子は救急車内で意識がなくなり、病院到着後のCTでの所見で医者は万事休すと申しました。貞子が私のもとから天空に飛び立ったのは、私にとつて実に理不尽なことであつたと思ひました。今もそう思っています。私の人生は五月二日正午で終わったのだと実感しました。

さて、三月十一日夕刻、日本列島背骨に海神の怒りが襲いました。百日を過ぎた現在でもなお全体の喪失がいかに分りかたは分りません。恐らく金銭では測りがたしのことであります。何ゆえ我が列島の東北地区が狙われたのか、これ又実に理不尽極まることではないか、と私は思ひます。思えば我が日本列島の歴史は凡そ三百年〜四百年単位で大きな喪失を経験し、しかし新しい日本を創出してき

ました。先の大東亜戦争での我が日本国ひいては個人の喪失は、思えば大したことでもなかったのかも知れません。日本国の再生ひいては新生は実に不思議でありますが、恐らく一天万乗の天皇家の存在によるところにあるのではないかと私は信じています。

現在世界は新しい潮流に棹をささんと各国は鎬を削っています。恐らくあと五年もすれば世界の覇権はアメリカ一国の手中に収まりきれなくなるのではないかと思われます。さて人生を喪失した私の勝手な予想を申し上げますと、日本国は次のように新生するものと確信しています。

(一) エネルギー問題

「脱原発」が順調に進み（これは昔の孫悟空のみつともないおねだりに応えた、これ又みつともない突然の例の思いつきの発言によ

ったとしても）二国間原子協定の現下のがんじがらめの桎梏から逃れることが出来る、即ちウランを燃料としている限り、我が日本は独立国になれない。プルトニウムが溜まれば溜まる程、そのことは加重する。

しかしして自然エネルギーはつまり反エコそのものである（そのわけはここでは長くなるので省略）結局化石燃料に戻ることになります。一千年分は充分であると聞きます。

(二) 政治・経済問題

「福島第一原発」の事故を神の啓示として米―加―豪三カ国に最終的「生殺与奪」の権利を握られていることを再認識し「脱原発」に踏み切る。あと二回か三回の衆議院総選挙を経て、マッカーサー憲法を断固として捨て、日本国新憲法を策定し、軍の統帥権、通貨発行権、司法権、この独立国の基本三要件の完

全な米国からの回復を果たす。経済は申すまでもなく今回の日本国喪失に（気を抜けば）繋がりがかねない東日本大震災を契機として復興景気が勃然と起こり我が国の経済の大きな牽引力となる。

(三) 近未来の我が日本国の立ち位置

独立を回復した日本国は、当然核武装する。これは戦争抑止のためのものなので、数百発くらいのレベルの高い核爆弾を十数隻程度の原潜に乗せて太平洋を遊弋させる。自然に日本の発言力は増し、有力な世界平和推進のリーダー国として興望をになうようになる。なお、科学技術の日進月歩に遅れをとることのないよう（特に原子力研究）学制の改革が行われ、世界平和推進のためのリーダーの養成に真剣に取り組むことになる。（終）

入来院貞子さんを偲んで



鉾之原 昌

私たち夫婦が、入来院夫妻と知り合ったのは、確か二〇〇七年の文化サロンでの出会いでした。私はその年四月に、鹿児島大学を定年退職し民間病院に勤めるようになっていましたが、いささかフリーになり時間を持て余し気味でした。その私に、家内が文化サロンにはいつてみたら、いろんな変わった人に会えるよという誘いに乗って入会したのです。私に強烈な第一印象を与えてくれたのは、坊主頭の毒舌家？重朝氏と、白髪で上品な貞子夫人でした。それから、ほとんど欠かさずに文化サロンに参加する度に、お話をする機

会があり特に懇親会にはご主人と焼酎を飲み
かわしました。

貞子夫人には、私が医者ということ、ガ
ン治療中のご相談も受けました。ただ、主治
医を大変信頼されており、抗がん剤も中止さ
れむしろ副作用がなくなり、非常に元気にな
られました。私も、その勇気に驚嘆し、尊敬
しておりました。病は気からと申しますが、
医学的な生半可な治療の無力さを身近に感じ
ることができました。

平成二十年五月には、入来町に案内してい
ただき、入来院家の歴史と島津家の関わりを
教えていただきました(写真1、2)。とくに、
全然知らなかった入来文書と朝河貫一氏の業
績をはじめて伺い感動しました。一九二〇年
代にこの田舎の入来で何年も調査し、英語で
書かれた文書を発行された米国の教授だと知
り、驚き敬服しました。私の友人で東大教授

をつとめた歴史家の山口隼正君が入来出身で、
ご夫婦と懇意で朝河氏の研究会にはいつてい
ることもはじめて知りました。本当に奇遇で
す。

また、平成二十二年八月には、入来での薪
能を七年ぶりに開催され、見学に行きました。
その時は、大変お元気でガンを患っているこ
とも忘れさせてくれる思いでした。どこにあ
のバイタリテイがあるのだろうと家内と感歎
しておりました。好天に恵まれ、私どもも二
組の友人夫婦を同行して参加し伝統芸能を味
わうことでした。本当に有り難うございまし
た。

その後、何回か文化サロンに参加していっ
つも懇親会のあと二次会にご夫妻と一緒にちよ
つと飲んで、つきあつて下さいました。いつ
もご主人の放言？をニコニコしながら聞かれ
ており、酔われてふらふらしているのを心配

しながらホテルに帰って行かれるものでした。本当に元気で夫婦和気藹々と過ごされていたので今回の訃報にはびっくりしました。百才まで生きる会をご主人が提唱されていましてしきつと二人とも長生きされるだろうと思っていました。あとでご主人にお聞きし、不慮の事故で不運が重なったことを知りました。ご葬儀に出席しましたが、多方面の名士の方々が来ておられ、その交遊の広さにまたびっくりしました。心からご冥福をお祈りいたします。合掌



写真1 貞子さんと
(平成20年5月)



写真2 清色城跡にて(平成20年5月)

亡き貞子様を偲んで



江藤 ヤエ子

五月三日の朝、重朝様からの電話で、貞子様の突然の訃報を知りました時は、驚きま

した。数年にかけて癌の治療をされており、「病気も回復しましたので、また頑張りますね」と、ペンシルクラブで話して居られましたので、また入来での「炉ばたセイ談会」も開催されるのだと喜んでいたのでした。

転倒された時、頭部の打ち所が悪かったのですね。手術の甲斐もなく旅立たれてしまい、まだまだ遣り残した事が多かったことと思います。一人残された重朝様には淋しくなられましたね。

お二人が早稲田大学時代に、学生結婚をされたことは、貞子様と会った、私の兄から聞いておりましたが、仕事を終え、郷里に帰郷されてからのお付き合いでしたので、約二十年でしようか？ 樋脇に住む叔母の葬儀の折に、従姉・久子様から「貞子様はあっさりした良い人だよ」と聴き、お会いする日を楽しみにしたものでした。

入来院を訪問しますと、少しボケが出ていた姑の世話も笑顔でしておられ、姉は幸せだなど思うことでした。五月五日の葬儀の折には、子福者の貞子様が羨ましくなりました。子供や孫たちが大勢で、遺族席の端に座った私は間もなく訪れるであろう自分の葬儀には、誰も居ないのだなと淋しく思いました。

相星先生の弔辞を聞きながら、私は何度も頷いておりました。熊本から来ていた甥は、「そんなことがあったの」と、興味深く聞い

ておりました。

信州から薩摩に嫁ぎ、入来文書を学び、花水木会を立ち上げて、薪能も開催され、本当に忙しい毎日だったと思います。その上、お父上様のご意思を守り、信州・長野霧ヶ峰・昭和寺には、三男の大圓さまを継がせて、気配りも大変だったことでしょう。

私は、重朝様の叔母だというだけで、会員にいられて頂きましたが、なにごとにもベテランの皆様には足並みを揃えることが出来ず、申し訳なく思っております。文を書くことは好きですが、何時も紀行文しか出せず、お恥ずかしい次第です。もう八十歳を超えましたが、まだまだ足腰は丈夫なので、旅は続ければそうです。今後共、宜しくお願い申し上げます。重朝様には淋しくなりましたが、後はまかせて、貞子様は安らかにお眠り下さいませ。



国際霊廟中観山同願院 昭和寺(諏訪市霧ヶ峰)

てい子さんの「いと」



田原 真里子

「これね、上等のすごくおたかい羊羹なのよ」箱入りの小さな包み。わたしは「ほんとにいいんですか？」とあっさりいただき、まずは一口。あまりの美味しさにこれは誰にも食べさせてなるものか！と隠す所を捜します。「主人がね、裏のけやきの枝を落とすと言うのよ。枝いる」これも早速軽トラックでもらに行きました。その枝の山はまだ私の家の庭先に積んであるというのに。てい子さんは霧の向こうに消えてしまわれました。

鹿児島市内への行き帰り、車の中で、政治の話、歴史の話など会話がはずみ、あつとい

う間に入来と言う事もしばしばでした。思い出は尽きません。本当にてい子さんには楽しい時間を沢山いただきました。

来年の春、入来院の下の川のほとりにはえている竹の子が、私の家の下を流れている入来川にぶかぶかと流れつきそうな気がしています。てい子さんありがとう。



故入来院貞子さんと薪能

下土橋 渡



鹿児島県薩摩川内市入来町の地域おこしグループ『入来花木会』代表として、七回にわたって入来薪能を主催され、ホームページを開設し旅行記やレポートなどをアップしたりしている著者の活動の最も良き理解者だった入来院貞子さんが、つまずいて転倒されるといふ不慮の事故による脳挫傷で平成二十三年五月二日、死去されました。七十八歳でした。

さつま町船木の著者の自宅より車で二十分足らずのところにある入来麓は、町並みが中世の名残をよく残していて、国の重要伝統

的建造物群保存地区（武家町）に選定され、入来院氏が本拠とした中世の山城・清色城（きよしきじょう）跡も国の史跡に指定されています。入来院氏は、鎌倉時代、関東の豪族として、現在の東京・渋谷に城を持ち、相模の国（現在の神奈川県）に勢力をもっていた渋谷氏が、鎌倉幕府から薩摩国の入来院などの諸郷を与えられて下向し、後に入来院と名乗るようになったのが始まりです。戦国時代を乗り切って薩摩藩を確立した島津義久、関ヶ原敵中突破で有名な義弘、秀吉に最後まで抵抗して自害し今でも金吾さあと呼ばれ親しまれている歳久兄弟の母は、入来院の出でした。夫で庶流入来院当主の入来院重朝（しげとも）さんが定年退職されたのを機会に、平成六年重朝さんとともに東京から入来に移り住んだ貞子さんは、先祖の渋谷氏が関東から下向して七百五十年になるのを機に、町おこし

に何かしたいと考えていました。そんな折、県会議員をしている人から『鹿児島には能楽堂がない』と聞いたのを思い出し、脳裏に、ふと『薪能』という語が浮かびました。というのは、入来院夫妻は、能楽観世流シテ方の若松健史先生（重要無形文化財総合指定保持者で平成二十二年九月に死去）に謡曲の指導をしてもらっていて、観世流の人たちを知っていたのです。頼めば来てもらえるのでは、と思って『入来薪能』の企画を思い立ちました。

資金援助してもらえないものか、地元行政（当時は薩摩郡入来町）に相談に行くと、町長は『議会の承認が得られないから出来ない』といい、議員に聞けば『文化事業には誰も反対したことはない』という水掛け論。結局、地元行政の支援も理解もないまま、私的な負担も限界ぎりぎりのなかで、能に全く素人の

地域おこしグループとその支援会の人たちの手づくりで平成十一年に第一回の入来薪能を開催することになりました。

何よりも心強かったのは、町の次代を担う若い実力者たちが支援会を作って、手足になつてくれるということでした。彼らはイベントの実行にも手慣れていて、何よりも問題な駐車場や会場の設営など、具体的な手順はすっかりお任せできるということでした。しかし、『能』は鹿児島の人たちにはほとんど馴染みのない世界のもの、地域おこしグループのメンバーも支援会のメンバーも全員がまだ一度も能を見たことがありませんでした。恩師で入来薪能の企画を引き受けて下さった若松健史先生が岡山の最上稲荷で薪能を開催するのを知っていた貞子さんは、実際を見なくてはと思い、岡山に見学に出かけます。

費用節減のため、県議の奥さんに借りたワ

ゴン車に乗り、平成十一年八月十七日朝七時、支援会の会長、音響照明担当、会場設営担当、舞台を作る大工さん夫婦とともに入来を出発、交代で運転しながら九時間かけて最上稲荷に着くと早速、大工さんはメジャーで舞台の高さを計ったり、音響係はマイクの所在を確かめたり、実地見学と調査に取りかかりました。

このようにして、平成十一年八月二十五日、東京から観世鍔仙会（てっせんかい）一行の皆様さんにおいて頂き、第一回入来薪能（演目『天鼓』前シテ・後シテ、若松健史）が開催されました。第一回が成功裏に終わったのを皮切りに、昨年（平成二十二年）までに七回の入来薪能が開催されました。

五年ぶりに第七回の入来薪能が開催されたのは、昨年八月二十八日のことでした。演目は、木曾義仲（源義仲）とその愛人・巴の悲劇を題材にした『巴』（ともえ）でした。前

場で、『ここ粟津が原に木曾義仲の御霊がおられる。そこにおいでのお僧にどうか供養を願いたい』と、里女（前シテ）が涙ながらに訴えます。その前シテを舞われた若松健史先生が、残念なことに、三週間後の九月二十日に出血性心不全のため七十五歳で急逝されたのです。若松健史先生のシテ装束姿の舞台は、入来薪能の『巴』が最後だったそうです。貞子さんのお悲しみは如何ばかりだったことでしょうか。

同年十二月、貞子さんは、若松健史先生最後の装束姿となった前シテの写真を十数枚A4サイズに印刷され、額にいれて、地域おこしグループとその支援会のメンバーにプレゼントされました。長年の労をねぎらったことでした。また、一枚を若松健史先生の奥様に贈られました。今になってみれば、凶らずも貞子さんの形見となってしまいました。

地元川内が舞台となっている能に『鳥追舟』（とりおいぶね）があります。室町時代の謡曲師、金剛弥五郎の作といわれ、薩摩国が舞台になっている唯一の能ですが、第四回入来薪能（平成十四年）でこの『鳥追舟』が舞われました。貞子さんのエッセイにつきのようにあります。

——（鳥追舟は）今までの曲よりワキツレと子方の二名が増えるばかりでなく、ワキも上級な人でなければならぬということ、京都の先生をお願いする。ハタラクというお手伝いも一人増えて費用は相当かかるのだが、後々にも川内市（現薩摩川内市）の記録に残ることを考えれば、ここは頑張るしか仕方ない。——

入来院夫妻の愛猫ピッピーちゃんのことをメールマガジンに書かせてもらうことになり、ピッピーちゃんの写真を撮りにご自宅に

お伺いしたのは、四月十一日のことでした。そのとき、貞子さんが嬉々としてピッピーちゃんを追っかけていらした光景がいまだに目に焼きついています。書き上げた原稿を貞子さんにお目通しして頂き、返事として四月二十四日、つぎのメールを頂きました。

立派なピッピーちゃんを有難うございます。もし最後に加えられれば、『お返事するピッピーちゃん』は、毎朝二人が仏壇に般若心経を上げるときちゃんと並んで座っているそうです』というのは如何ですか。

では5時半にお待ちします。

入来院貞子

翌二十五日の夕方五時半に、お借りしていた本を返しにご自宅を訪問し、お土産に貞子さん手づくりの筍のおこわを頂いて帰りまし

た。これがお会いした最後になりました。

5月5日、葬儀・告別式が二時間にわたってしめやかに執り行われ、八人の方が弔辞を述べられました。全国にトップレベルの方をたくさんお知り合いに持たれ、またご自分もトップレベルの才能をお持ちの方でしたが、そうしたことを微塵も感じさせない方でした。それがまた貞子さんの存在の大きさだったように思います。ご自宅を訪ね、おとないを入れれば、今でも『どうぞ』と優しい声で迎えて頂けそうな気がしています。改めて、来院貞子さんのご冥福をお祈り申し上げます。



愛猫ピッピーちゃん
(平成23年4月11日撮影)



第7回入来薪能で前シテを舞われる故若松健史氏

拝啓 入来院貞子様



岩崎 好江

「日中友好の会に出席してくださらない？
中国の留学生は餃子作りが上手なのよ」とお
誘いを受け、餃子作りの会かと気軽に受けて
出席すると錚々たる会員の方々の総会で、恐
縮しつつ同席して留学生達と歓談し、共に写
真に収まり、夕刻ホテルまでご一緒した四月
二十九日。その三日後にお別れの時が来るな
ど予想も出来ず、未だに当日のにこやかな笑
顔の写真にご逝去が信じられない思いです。
私が、最後にお会いした一人だったとの事に、
翌日（三十日）吉野公園の花博にお誘いし、
現世で好きな花々を眺めてもつと楽しく幸

せなひと時を過ごせて戴けず、入来までお送
りしなかったことが今更ながら悔やまれます。
仙巖園の曲水の宴や、薩摩川内市教育委員
会のご案内で個人では伺えない史跡探訪にお
誘い頂たり、炬ばたセイ談会では台所での支
度に親しく接して頂き、筍堀り等色々な思い
出がその折々のお顔と共に浮かんで参ります。
まだお聴き足りなかった日中友好協会の事
や文学の話、長野のこと、お約束したタコ焼
パーティーは如何でしょうか？ 私達は今
年も又北海道へ参り、先日ご親友の美瑛の山
田様と親しく過ごしました。

能の世界で霊はこの世とあの世を融通無碍
に往復できるそうですね。霊や千の風になっ
て、願っていらした北の地の見知らぬ世界
でゆっくり心を遊ばせる夢を実現なさつ
て下さいませ。

かしこ。



第7回入来薪能で主催者の挨拶をされる貞子さん
(平成22年8月28日)



重要伝統的建造物群保存地区(武家町)・入来麓の春

オヒイサマの電子郵便



渋谷 繁樹

くお願いいたします」で終わっている。顔をあわせながら、電話でおしゃべりしながら、電算機で交信しながら、何度、同じ言葉と文面を、聞いたり見たりしたか。大先輩に不肖の後輩は、常に、原稿を催促されていた。

督促されているうちがハナなんだろうに。

携帯型電算機の電子郵便の保存箱に、テイコサンからの電子郵便が、七十通、残っている。一番新しい日付は、二〇一一年四月二十五日だから、いなくなるほぼ一週間前の送信になる。時刻は午前七時五分、朝ご飯の前だろう。「二十三日夜はちよつと残念でした」と始まっている。四月二十三日の夜、入来院夫妻は鹿児島で宴会だった。顔を出してと言われていたのだけれど、当方は鹿児島以外の場所です飲ん方だったので、会えなかった。

会う時に会っていかないと会えなくなる。

最後の電子郵便は「『炉ばたセイ談』よろし

テイコサンは短歌も添えていた。「美女ありて美女なりしかば無残なり死を告ぐ画面のリズの老醜」。短歌大会の出品作品で大会出席者の投票で優劣が決まる。「私の短歌は○票でした。予測していましたがどうもありません」。要するに、誰も票を入れなかった作品になる。投票は記名だから自分を入れると手前味噌がばれる。らしいと言えづらい作品で、率直果敢、修飾無縁、言いたいから言つてなにか悪いのよ、と聞き直っている。オヒイサマなのに、オヒイサマだからか、いざ、批判の俎に載せると、鋭利な舌鋒は切り

まくった。老醜だから老醜なのよ、断定と決断に、躊躇も遠慮も気配りもなにもない。

批判もされているうちが盛りなのかも。

短歌作品の背景の説明も電子郵便には付いている。「フィンランドの昔話にナイナという美女がいて、名前は忘れたけど彼女に惚れ込んだ若い男がいたのですが、年取って醜くなつてからその男を追いまわす、男はひたすら逃げる。結末は忘れたけれど年取った女の執念深さが印象的な話でした。やっぱり年月は無残だと思えます」。エリザベス・テラーを短歌に料理するのに、北欧の物語を素材にするのが、テイコサンの知性の背景であり奥行きでもある。知のきらきら星は、時代も国境も、いとも軽やかに飛び越えていく。話を聞けるうちが、幸せなんだろうに。

原稿の催促文の前置きは「にしき江で講演なさるのですね。私は五月十八日がCT予定

日ですので残念ですがパスとなります」。当方が短歌結社の一つで話をするのを聞かれなくて、胸をなでおろしたのを思い出す。知の塊に後で何と言われるかを想像したら、とてもテイコサンの前で、講演なんかできるわけがない。お聞き逃していたいたのは幸いなんだけど、CT予定日の字を見ると、切なくなる。ガンをコテンパンにやつつけて、大勝利を確認するための検査だったのに。

最後から二番目の電子郵便の日付と時刻は四月二十二日午前九時半。「昨夜は三木会でした。郵便局長や大工さんたちとの月一の我が家での会費五〇〇円の飲み会。新会員に野間さんがなって、政界の裏話など楽しかったです。用意は私ですが、オジサンはもっぱら片付担当なので今はまだ流しで、焼き肉でこびりついた鉄板と格闘しています」

オヒイサマはキモイリネエチャンの役も

こなしていた。薪能からご近所との寄り合いまで、制作総指揮を執っていた。諸般の事務能力に長けていた珍しいオヒイサマだった。

同じ電子郵便の終盤となると、もう、舌を巻くしかない。「ツイッターをはじめたら時間がなくなりました。田中康夫と鳩山がフオロワーになっています。私は、父の昭和寺とまごころ青春短歌大会のPR、それに菅内閣不信任をツイートしています。では、今朝はこれで失礼します」。仕事が電算機の専門家だったにしろ、情報発信の先端に立ち続け、年齢もガンも老醜も制圧して、入来から日本と世界をヘイゲイしていたのだけでも。まだ行ってしまわなくて、よかったのに。

(南日本新聞記者)



三、故入院貞子さん関連資料

励ましの言葉に寄せて



入院貞子

「今日はいい励ましの言葉が載っていた」。朝食を済ませて炬燵に座ると夫が言った。平成二十三年三月二十二日、東北関東大震災からもう十一月も経った。

夫は、雨天でない限り毎朝四時に起きて、一辺が三十間近くもある屋敷の生垣の掃除を済ませ、車で川向いの墓参りに行く。そして私が起きて来るまでの小一時間、茶の間で新聞に目を通している。

私と云えば、真夜中が一番集中出来るので調べものなどして二、三時間朝寝する。七時に目覚ましのラジオが消えるのを合図にやっど起き出て洗面を済ませ、夫と猫のピッピーちゃんと神棚に参り、仏壇に般若心経を上げてから朝食を取る。それから炬燵で夫が手渡してくれる朝食後の薬とサプリメントを飲んで一緒に朝ドラを見るといったお決まりの穏な日々が始まるのだ。

夫は「どこだったかな」と新聞をめくって探した。それは十五面に掲載されているアンジェイ・ワイダ監督からの一文だった。

ワイダ監督といえば『地下水道』『灰とダイヤモンド』『大理石の男』など、ソ連や共産党の支配下にあったポーランドの暗い社会を鋭い視線でリアルに描いた映画の監督である。紙面のタイトルは「悲観しない日本を尊敬」とあった。「日本の友人たちへ」ではじまる心

温まる励ましの言葉を、夫は声を出して私に読んで聞かせてくれた。

彼の書面は日本人が度重なる悲劇や苦難を乗り越えて来たことへの賞賛に満ちていた。「悲観どころか日本の芸術には生きることへの喜びと樂觀があふれています。日本の芸術は人間の本质を見事に描き、力強く、様式は完璧です」と讃えている。

そして一九九四年ポーランドの古都クラクフに日本美術・技術センターを設立したと、二〇〇七年七月天皇皇后両陛下が訪問されたことへの感激を語り「私たちにとって記念すべき出来事であり、以来、毎年、私の日本美術・技術センターでは記念行事を行ってきました」という。

そして最後に「日本の皆さんへ。私はあなたたちに思いをさせています。この悪夢が早く終わって、繰り返されないよう、心から願

っています。この至難の時を力強く、決意をもって乗り越えられんことを。

ワルシヤワより アンジエイ・ワイダ」
感激屋の夫はすぐ涙声になる。私も胸にじんと来るものがあつた。彼はクラクフ美術大学で絵画を学んでいたというから、ひとしお日本美術に関心が深かったのだろう。原爆を落とされ、人類の経験したことのない災害を受けたにも関わらず恨み言一言も漏らさず、復興した日本人に驚異に似た尊敬を持ったのだと思う。

私は、薩摩川内市の生んだ偉人、改造社社長山本実彦がアインシュタインを日本に招待したとき、アインシュタインが「人類に「日本」という尊い國を造って下さったことを心に心から感謝する」と言ったという話を思い出す。

外国の報道は、日本では震災の混乱の中、

何の略奪行為もなかったことに驚いている。テレビで見る被災者は困窮の中にありながらも「ありがとう」と言っている。世界各国からの援助隊の人々はこうした穏やかで慎ましい日本人に接することにより、日本を知って日本ファンになることだろう。そして日本の『和』の心が全世界に広まり、平和に向かって歩むようになるのではといった希望を持つものだ。

公民会から救援物資を出す場所の知らせがあった。終戦後、東京でユニセフから配られた品物は、ブカブカのハイヒールや着古した洋服等だった。あの頃は日本中に何もなかった。しかし豊かになった今は古着など出せない気がする。明日は恥ずかしくないような物をよく吟味して公民会に出そうと思う。

四国にいる娘から電話があつて、子供の被災者を二人引き受けることにしたという。二

人の息子がともに巣立ったので二階の子供部屋が空いたからだろうが、離れた四国で実際に受け入れる決断をしたのはえらいと思う。八十年ほど前の関東大震災のとき、祖母が孤児を引き取るのだと木綿緋の反物を買ってきたことに驚いたと母が語っていたことを思い出した。実現はしなかったようだが、やはり血は争えないと思う。

先日、私の活動に協力してくださっていた水流通雄さんが、前に住んでいた家が空いている、福島の人を受け入れてもいいが誰かいないかと尋ねに來られた。朝河貫一顕彰協会は福島にある。電話が通ずるようになって早速連絡したが、それぞれもう避難されていた。県や市からの奇特定人々を募集する呼びかけなどないのだろうか。

津波より大きな災害になりかねない原発の事故に目を離せない状況がまだ続いている。

しかし予言の能力もあると自称している鶴丸出身の副島隆彦氏が「強運にも最悪の状態を脱した」と言っている。

そうだ。間もなく復興の槌音が響きわたり、活気ある日本が戻ってくるに違いない。私は日本の底力が世界をリードする日も遠くないだろうと信じている。

(随筆かごしま 一八五号より)



五年ぶり山城に幽玄美

第7回 入来薪能

入来院貞子



宵闇のせまった中世の山城を背にした能舞台の静寂をかすかな笛の音が、そして裂帛の鼓が貫く。篝火の炎が風に揺れて、荘厳な舞台を照らす。凜とした舞台にしずしずとワキが登場して修羅物の巴の舞台が始まる。

この清色城址で行われる入来薪能は七回を迎えた。平成十年の渋谷氏下向七五〇年のイベントの成功に続く町起しの催しを模索していたその年の秋、在京中私たち夫婦がご自宅に伺って謡曲をご指導して頂いていた鍔仙会の若松健史先生が、長崎の諏訪神社で諏訪を舞うとお聞きした。私はこれだと思った。

そして「先生、長崎までいらつしやるなら鹿児島にもいらして下さい」と頼み込んだのが始まりだった。

お忙しい日程を縫ってご来鹿頂いて、この清色城址をご案内し会場にどうだろつかと伺った。そして先生から「ここは最高の舞台になる」と折紙をつけて頂いた。実行に踏切ろうにも、実際の作業に当たる土地の者は誰一人能を観たこともない。百聞は一見にしかずと、岡山の最上稲荷で薪能をなさる先生の舞台を観ることにした。

ワゴン車に町の企画課長と職員、大工さん、照明音響担当者と私に花水木会会計の六人で早朝出発。一泊の見学を強行した。そして舞台や照明など実行に必要な知識を得て第一歩が踏み出せたのだった。

第一回は「天鼓」。第二回に「巴」を予定していたが雨で中止。それから「清経」「鳥追」

「屋島」「忠度」と基本的に毎年続けて来た。しかし赤字を個人的に補うのに限界が来ていたことと、私が発癌したため五年間の空白となつてしまった。今回再開出来たことは本当に幸せなことだと思う。

ご来場の方々は異口同音に「素晴らしい」「感激した」と云われる。実際にご覧になれば、日本の伝統芸能の持つ芸術性に打たれるのだ。そして私はその意義を噛みしめる。ただ赤字は入場者数に反比例するので、今年も結構な額を背負う羽目になってしまった。

この入来薪能が赤字に悩まされることなく大らかに企画できるような仕組みが出来ないものだろうか。この地の行事として、より多くの方々に感動を与え続けることが出来るようになることを切望している。

（鹿児島謡曲連合会報「風姿」五号より）



第7回入来薪能『巴』、後シテ(清水寛二氏)

故入院貞子さんの

プロフィール



略 歴

- 昭和八年十一月十七日 長野県諏訪郡
上諏訪町で出生。
- 昭和二十八年三月 県立諏訪二葉高校卒
- 昭和二十九年三月 早稲田大学第一文学部
史学科国史専修に入学

○昭和三十一年三月 在学中、入来院重朝氏と結婚。

○昭和三十三年三月 同大学卒業

○昭和四十五年三月 日本電算機総合学院を修了後、富士電機株式会社東京工場事務管理室に嘱託勤務

○昭和六十二年四月 全労済システムズ入社

○平成五年二月 同社を定年退職

○平成六年夏 夫の故郷、薩摩川内市入来町に移住。

入来花水木会代表・朝河貫一研究会理事・鹿児島市日中友好協会理事・文芸誌「火の鳥」「ゆうすげ」歌誌「にしき江」同人として活躍

○平成二十三年五月二日逝去

法名 文珠院朝室慈貞清太姉

入来院貞子 作品リスト

現代小説・論評（二〇作品）



青葉の頃（火の鳥五号）

セピア色の写真（火の鳥六号）

虹の回想（火の鳥八号）

猫三昧（火の鳥一〇号）

驟雨（火山地帯一一九号）

なごり雪（火の鳥十三号）

残照（火の鳥十四号）

茜雲（火の鳥十五号）

明日の風（火の鳥十六号）

連理の星（愛蔵と黒光）（火の鳥十九号）

歴史小説・歴史論説（七作品）

白芙蓉（はくふよう）〈火の鳥七号〉

甲乙の矢〈みなみの手帖九十七号〉

断絶〈火の鳥九号〉

密約〈火の鳥十一号〉

痛恨〈火の鳥十二号〉

流星の譜〈火の鳥十七号〉

紙背の闇を覗く〈火の鳥十八号〉

エッセイ（一四八編）

平成七年（八作品）

薄暮（はくぼ）〈詩とエッセイ〉 他

平成八年（一〇作品）

半世紀ぶりの便り〈詩とエッセイ〉 他

平成九年（十二作品）

スーパードウル〈詩とエッセイ〉 他

平成十年（十三作品）

山茶花〈詩とエッセイ〉 他

平成十一年（六作品）

信州味噌〈マルイ社内報Q〉 他

平成十二年（十一作品）

蠟梅〈詩とエッセイ〉 他

平成十三年（九作品）

モエの旅〈随筆かごしま〉 他

平成十四年（六作品）

疱瘡踊り〈随筆かごしま〉 他

平成十五年（八作品）

障子貼り〈随筆かごしま〉 他

平成十六年（五作品）

友ありて〈随筆かごしま〉 他

平成十七年（六作品）

鹿児島十年〈随筆かごしま〉 他

平成十八年（七作品）

厄払い〈随筆かごしま〉 他

平成十九年（十二作品）

母の難しさ（池田学園）他

平成二十年（九作品）

父の背中（随筆かごしま）他

平成二十一年（五作品）

十二年目のモエ（随筆かごしま）他

平成二十二年（七作品）

韓流ドラマ考（随筆かごしま）他

平成二十三年作成（二作品）

年寄りの冷や水（随筆かごしま）

励ましの言葉によせて（随筆かごしま）

（絶筆）

史）

祖父の手記から家系を辿る（信州山崎家）

朝河寛一博士と入来文書

・ 朝河博士顕彰協会と私たち

・ 朝河博士のご紹介

・ 「入来文書」文書の出典

貞子の語る入来文書（火の鳥二十号）

寄稿文（二編）

世界都市十字路会議報告（南日本新聞）

朝河博士と私（朝河貫一研究会ニュース）

研究論文（5篇）

自伝（一篇）

柏田盛文伝（新潟県民より良二千石と讃えら

れた）

もがり笛（同人誌ゆうすげ）未完

渋谷五族の消長（一二四七年の下向からの歴

短歌（二六四首）（平成七年より）



第6回入来薪能『忠度』、後シテ(清水寛二氏)(平成17年8月27日)



入来麓の玉石垣

四、主義主張、エッセイ、旅行記

生体解剖事件

百田 陽一



四月初旬に博多経由で全通した九州新幹線に乗って鹿児島入りし、ゴルフをツアープレーして横浜に戻りました。博多では、県庁そばの東公園を散歩、そのあと地下鉄で西へ向かい、大濠公園を散歩しました。東公園では亀山上皇と日蓮上人の銅像が博多湾を睨んで建っていました。亀山上皇の像には、「敵国降伏」の文字が刻まれていました。この銅像からほど近い宮崎宮にも「敵国降伏」の大きな額が掲げられています。ご承知の通り、博多は二度にわたって当時世界最大、最強の帝国だった「元」をいずれも台風という神風によって

ではありませんが、撃退したわけです。博多湾はアジアのいや世界史の現場、最前線だったことを改めて思い知らされました。

大濠公園では、ただの一軒しかないレストランで遅めの昼食を摂ったんですが、中年や若い女性たちでいっぱい、しばらく時間待ちさせられる盛況ぶりでした。私は福岡城(黒田城、舞鶴城)の外濠的なこの濠が福岡市で一番好きなおところです。周囲二キロで格好のジョギングコースとしても親しまれ、真ん中に中の島が走り、濠では、ボートを漕いで楽しむ市民の姿が絶えません。いいロケーションだけあって米国の領事館が以前からあり、NHKも天神から引越してきてだいぶたちます。

ということ、今回は出身地福岡、博多への思いを語ります。朝日新聞記者時代、西部本社発行の夕刊に「偏西風」というコラムが

あり、各支局長（現在は総局長）や本社デスクが輪番で執筆を担当していました。宮崎支局長時代に執筆した偏西風の中からふるさと関連の二編を紹介します。

★★ 生体解剖事件

福岡高裁の裏に、コンクリートの四角い建物がある。こどものころ近くに住んでいてその不気味な存在が気になって仕方なかった。上坂冬子の「生体解剖」を読んで、それが旧軍の西部軍司令部「防空作戦室」で、そこにいた大佐が、米軍の捕獲搭乗員を九大に引き渡し、いわゆる九大医学部の生体解剖事件が起きたことを知った。

三月二十七日、鳥巢太郎さんが八十五歳で亡くなった。各紙の死亡記事に生体解剖事件に連座、とあった。死刑判決を減刑され、巢鴨拘留所を出たあと、福岡市の大名で開業さ

れていた外科医院に何度かお世話になった記憶がある。もちろん、こどもの時分なので、「事件」については知らなかった。「生体解剖」のあとがきに当時、宮崎医科大学の教授で、現在、学長の木下和夫氏が上坂さんに手紙を出していたことが紹介されていた。

木下さんが、一九五六（昭和三十一年）に九大の医局に入局。事件の主要な人物である第一外科のI教授（故人）の顕彰碑を建てる話が20年ほど前に持ち上がったとき、「医師としての良心から許せない」と反対した一人だ。

「鳥巢さんはすぐに、生体解剖から手を引かれたが、事件にかかわったこと、教授を引き止められなかった、という自責の念で残りの人生は懺悔（ざんげ）の日々だった、と思う。私自身、本人から事件について聞きたいという衝動にかられたこともあったが、でき

なかった。死亡記事を読んだ時、生体解剖事件も歴史になった、という感慨を覚えた」と木下学長はいう。

★★平和台球場

平和台球場で、もうプロ野球を観戦できない、というニュースは、球場そばで小学5年まで過ごし、球場を含む舞鶴場一帯が「ウサギ追いし、ふるさと」である私にとって感慨深い。

球場ができる前は、一面の野原で、オートバイレースが開かれたりしていた。球場建設が始まると、トロッコに乗って遊んでは、作業員に追掛けられ、必死で逃げた思い出がある。

球場オープン間もない巨人VS阪神戦だった、と思う。詰めかけたファンが折り重なって死者が出る騒ぎになった。娯楽の少ない

時代。すごい人気だった。試合がある日はたいがい球場に足を運んだ。外野の石垣をよじ登り、鉄条網をかくぐくぐつてもぐりこむことが多かった気がする。

昭和27年7月16日の西鉄VS毎日戦、いわゆる平和台事件も目撃した。毎日の選手がわざとショートゴロなどを取らず、日没ノーゲームにしたのはこどもの目にもわかった。大人たちが次々とフェンスを乗り越え、グラウンドになだれ込んだ。そのあとを追い、内野を走り回った。

球場建設の際、黄土色の布目瓦などがいっぱい出土、ほったらかされていた。舞鶴城のものと思っていたが、今思えば、場所的には、鴻臚館の出土品だったのかも知れない。

アマチュアの球場として出直すそうだが、平和台周辺が、これからも福博の市民の「オアシス」であり続けて欲しい。

インサイド・ジョブ



百田 陽一

思い出ばかりでは、芸がないので近況の一端を述べさせてもらいます。横浜にきてからは二回映画を観にでかけました。二回とも新宿へでかけました。そこでしか上映してないためです。

一回目は米陸軍の日系人だけで編成したいわゆる二世部隊のドキュメント「442日系部隊アメリカ史上最強の陸軍」。すずき・じゅんいち監督によるこのドキュメントは感動的でした。二点だけ触れますと、すごいスピードで進撃する二世部隊がローマに一番乗りする寸前で、なぜかローマを迂回するように命

じられます。欧米人にとってローマ帝国の中心地だったこの地にアジア系の部隊が一番乗りするのは、耐え難いことだったのでしよう。もうひとつは、ドイツ南部に進んだ二世部隊は、ダッハウ強制収容所を解放し、ガス室送り寸前のユダヤ人を少なくとも一〇〇人以上救いました。この事実も一九九二年まで公になりませんでした。

もう一つの映画は今日、五月二十八日に観てきたばかりの「インサイド・ジョブ」です。週刊朝日に森永卓郎が紹介していたので知ったのですが、とにかく一切の虚飾を排し、インタビューに次ぐインタビューで構成されたドキュメントでした。監督はチャールズ・フアーガソンで、第八十三回アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞受賞作品です。要するに世界に吹き荒れたリーマン・ショックは政府を中心とするウォールストリートを中心とする

金融界、そしてハーバード、コロンビアというアメリカでも超一流の学問の府の学者連中が結託したグルになったほど犯罪に近い詐欺事件だと断じています。

しかし、学者連中は絶対に自らの非を認めようとはしません。口を開けば、「アブソリュートトリイ ノー」なのです。学者としての良心などそんなナイーブな感情が通用する世界ではない、感じます。それでも数か所、答えに詰まるシーンもありました。80年代以降急速に製造業が凋落し、金融工学に活路を見出したアメリカ。「技術者は橋などを造るが、金融工学の技術者は夢を造る。ただ、それがいい夢ではなく、nightmare(悪夢)だった」というセリフが印象的でした。いずれにしても関係者全員が日本のソロバンでは考えられない超高額の金を堂々とつかんでしばし退場するだけです。

おもしろかったのは、下半身のスキヤンダルで辞任したIMFのストロスカーン専務理事、そしてその後任として有力視されているフランスのラガルド・経済・財政・産業相が頻繁に登場することです。

FRBのグリーンズパン、バーナンキそしてポールソン、ガイトナーと続く財務長官。何か手を打つべきだと指摘されながら、だれも結果として何もしませんでした。オバマ大統領はイスラエルに対して一九六七年の線まで戻るべきだと中東和平で踏み込んだ感があります。このドキュメントでは、オバマ政権は、ウォール街にバックアップされて誕生した政権なので、これからも何もかえられないだろうと突き放しています。

こういった現状の中で、我が国はどんな財政、金融政策でこの巨人と向き合うのでしょうか。とても菅政権にこれを乗り切る力はな

く、暗澹たる気持ちになります。現関係の一人、与謝野馨が奥さんと思しき初老の婦人と体格のよい秘書と三人で「インサイド・ジョブ」を観にきていました。これからの政策決定に少しは影響するのでしょうか。意外と長持ちしそうとも見られる菅政権ですが、自民が不信任提出に踏み切れば、あつという間に退場ということも十分にありそうな雲行きです。



時の過ぎ行くままに



桐野 三郎

※生産とは――

新宿で飲んだくれていた時代がある。大学時代の四年間だ。大学には行かない日が多かったが新宿に出かけない日はほとんどなかった。

飲んでいて終電車に乗り遅れると行きつけの飲み屋の二階にもぐりこませてもらうこともあったが、夏の暑い夜などは新宿伊勢丹のショーウィンドウの出っ張った部分に寝たりもした。大理石(?)の冷たさが快いのだ。だからあの頃の新宿のことはいわゆる朝、昼、晩だけでなく、夜がほのぼのと明けはじめる

なんて時間帯の裏街の表情まで知っていた。

そんな新宿の夜明けの風景を書いた森村誠一の小説を読んだことがある。小説の題や筋は覚えてないが、主人公がまだ明けやらぬ新宿東口でゴミの山を見つめながら、「生産とはつまりゴミを造ることだったんだ」と悟る場面が妙にリアルだった。

ナルホド。ぼくらの身辺にあるテレビや冷蔵庫や洗濯機などはもちろん、机や椅子やベツドに、衣類や本棚なんてものもいずればゴミになる。いや、そればかりか、写真アルバムとか日記などの記録や、先祖伝来の書画骨董なんてものもまで時間の差こそあれ究極、いずれゴミになる運命は免れない。

ということは、日々生産されるものすべてが、それが活用される期間を飛び越して考えればつまりゴミだというわけである。

ぼくはモノに対する執着心があまりない。

ことに何かを蒐集するなんて趣味とは無縁だ。そんな趣味のある人をバカにするつもりはないが「所詮はゴミにしかならないものを」という気持ちはどこかになくもない。これも新宿の夜明けのゴミの山が記憶の底にあるせいから。

新宿でぼくが飲んだくれていたころからおよそ六十年が過ぎて、いま二〇一一年夏。

3・11ショックから四ヶ月が経過したのに被災地の瓦礫の山はまだいくつも残っている。

「モノは究極はゴミになる」どころか、被災地の人たちの所有するものは、家や車までひっくり返して全てが一瞬にしてガレキの山（つまりゴミ）と化したわけだ。

ガレキの山また山。あの荒涼たる映像をテレビや報道写真でぼくはもう何十回みせられたことだろう。

※ 文明とは――

それにしてもガ・レ・キという仮名文字三つを組み合わせたこの音の響き、何処かおぞましく不吉なものを感じるのはほくだけだろうか。

坊主憎けりや袈裟まで――の例かもしれないがこの語感、網膜に焼き付いてはなれないあの光景とびつたりかさなるようになってしまった。

3・11は東日本中心であれだけだったのだから、もし東京中心だったらなどと考えるのとゾツとする。高層ビルの揺れは3・11ですら想定外の複雑さと大きさだったらしいから。被害も当然想定外の大きさになることは必至。ということはガレキの山も想像を絶するものになったはず。

同じような地震がニューヨークだったらとかドバイだったらなどと考えているときりが

ないが、最後にぼくらが悟るのは、森村誠一流でいえば「文明とはつまりガレキの山を築くことだったんだ」ということになりそうだ。

それにしても千年に一度の災害を「想定外」とはよく言うぜ。一万年に一度の周期だつて百万年の間には百回やつてくるのだ。そしてその一回は明日かもしれない—というのに。

※ 人類は頭脳の使いかたひとつで—

恐竜は巨体に恵まれたがゆえに食物連鎖の頂点に立つて一億数千万年の繁栄を謳歌した。しかしその巨体ゆえに、やがて環境の変化に対応できずに絶滅していった。

つまり進化の摂理としては優れた特性を持つものが勝ち残つて繁栄を続けて行くが、やがてはその特性のゆえに淘汰されてゆくということだ。と言うことは、人類ももちろん他より優れた頭脳を持ったがゆえに地球上に君

臨出来たわけだが、やがてはその頭脳が発達し過ぎたがために滅亡への道をたどることになるということだろう。

そう考えてくると、いま被災から四ヶ月も経過するのに制御不能に陥つたままの福島原発なんかその予兆のようにも見えてくる。人類の豊かさど利便性に貢献するはずだった先端技術の粹が、実は人間の手に負えない怪物だったという笑うに笑えない事実。周辺のガレキの山がそんな文明の不吉な未来を暗示しているともいうように—。

足元を見回してみれば最低所得層のわが家ですらいつの間にやらオール電化。「アンキ」がなかったら一日たりともにつちもさつちもいかなない現実に改めて気づく。いったん天変地異でも起こった日には、周囲の生き物の中でサバイバルゲームに最も弱いのがぼくたち人間であることは間違いない。

― 人類滅亡の日を想像してみる ―

あとに地球上に残るのはガレキの山また山、という荒寥たる風景だろう。人類が二足歩行を始めてからおよそ六百万年。その間営々と築いてきた文明とやらの総量は所詮巨大なガレキの山でしかなかった―ということか。

※ 文明の軌道修正は ―

人類が衰亡への道をたどりはじめていくとすればその理由は、持てる知能を「豊かさ」と利便性の追求―だけのために濫用し過ぎて、いわば、麻薬中毒のような症状に陥っているからだ。

ならば軌道修正のためには、この症状の治療に成功すればいいだけのこと―なのだが。その中毒症状がこうも重篤であったのかに驚かされているのが現状であることもまた事実。

政官財界をはじめ、学者やマスコミを含めたいわゆる日本の文化人たちまでが原子カムラに群がり、電力会社のお先棒をかついで、世論を煽じ曲げてまで利権にありつこうとしているていたらしく。中毒症状回復の道は険しく遠いのもかもしれない。

地球の周囲はおよそ四万キロ。考えようによつてはとても小さなホシ（惑星）である。しかもぼくらは、いや、ぼくらだけでなくこのホシに生きとし生けるものの全ては、それを取り巻く薄い皮膜のような大気と水なしには生きてゆけないのだ。それを汚してしまつては、人類に未来がないことだけは確かだろう。

我が国には古来から「知足」という、たった二文字でその全容を知り得るすばらしい哲学があった。いま、文明の在り方を問い直すには欠かすことのできないキーワードではな

いだらうか。

地球というホシは人類だけの住み処ではない。

※ 未知との遭遇 ―

七月二日、地元南日本新聞の「海外こぼれ話」に「科学的予測？」という小さな記事が出ていた。わざわざクエスチョンマークをつけた意味は、「ほんとかよ？」と言いたかったのだろう。内容は次のとおり。

ロシア科学アカデミーチームが、人類は二十年以内に宇宙人と対面するとの予想を発表した。そしてその宇宙人は人間によく似た格好をしている可能性が高く、二本ずつの手脚を持ち、頭は一つと想定されるという。

研究チームは宇宙に信号を発するなどして冷戦時代から地球外生命体を探し続けてきたが「原子の生成と一緒に、生命の発生は必然

なのだ」と自信満々らしい。発信元は「モスクワ、ロイター共同」となっている。

実はこの記事、八月二十五日発刊予定の「随筆かごしま一八七号」にも「見上げてごらん夜の星を」という題でぼくはネタにしている。人類の未来を考える上では恰好の話題だからだ。

でもそれを、再度この稿で取り上げる理由はほかでもない。「炉ばたセイ談」仲間の畏友入来院重朝氏が同誌6号に書いていた「二十年後の世界」と関連づけて考えたいからである。

彼は「これから二十生きるつもりですから予想します」とはっきり断った上で世界情勢を予測し、「二十年後のその状況をこの目で見届けてサイナラしたい」と書いている。

もちろんその予測の中に宇宙人との対面は出てこないが、この情報でさらに想像は膨ら

んで恰好の酒の肴になるのではないだろうか。次の炉辺での焼酎が楽しみだ。

ところで、このぼくが宇宙人と対面のニュースをどう扱らせているか―だが、もしそれに興味のある読者がいらしたら「随かご」を讀んでいただけたら有難い。

ぼくの人生にとってエポック・メイキングな出来ごとといえ、日本の敗戦に次いでこの春の東日本大震災だったのだが、もし宇宙人と遭遇の日を見ることができたらそれをはるかに上回る大事件である。

ぼくもその日が訪れるまでは死んでも死にきれないとお思うようになった。

※ 出逢いとは ―

生ある者は死し形あるものは滅す。同じように始まりがあるものには終わりがあるのは自明の理。

人類が滅亡の危機を二度や三度乗り越えたからといって、もちろん永遠に続く種の存在なんてあり得るわけがない。数千年か数万年、いやあるいは数億年かは知らず、人類滅亡の日はいつか必ず訪れるわけだ。

そんな気の遠くなるような時間のながれの中で二十一世紀がはじまったばかりのいま、鹿児島は山北の incoming の炉辺に集う縁の不思議をいまさらのようにおもう。この抱きしめたくなるような縁を結んでくれたのが入来院貞子さんだった。

その経緯も「山北の便り消えても」というタイトルで「随かご一八六号」に書かせていただいたから重複は避けるが、貞子さんには感謝の気持ちは当然ながら、あのはにかんだような優しい笑顔に甘えてばかりいて申しわけなかったと、いまつくづくおもっている。

ぼくはあの笑顔を忘れない。

※時の過ぎ行くままに――

「炉ばたセイ談」もこの7号からは、貞子さんに代って、昨年から仲間に加わっていただいた中西喜彦氏が編集を担当してくださる事になった。うれしい限りだ。

同氏が「セイ談6号」に寄せて下さった〈能楽で紡ぐ人生の指針〉という一文からはまた、教えられることの多さに驚いたものだった。これもまた、これからの炉辺での焼酎が楽しみである。

ぼくもこれを機に、「時の過ぎ行くままに」というちよつぴり気障なタイトルで折々の心象風景などを描（書？）かせていただくように思っている。

すでにお気づきの読者もおいでと思うが「時の過ぎ行くままに（アズ・タイム・ゴーズ・バイ）」とは、イングリット・バークマンとハムフリー・ボガード主演の往年の名画「カ

サブランカ」の一場面、リックの店で黒人サムが弾いていたあの曲の名だ。

出会いがあればいつか必ず別れの時が訪れる。そんな切なさを想うときに思い出す曲であり、言葉である。



獅子島・長島の旅



江藤 ヤエ子

一九六五年から三年間暮らしていた長島へのツアーが企画されていたので、友人を誘って参加した。

鹿児島中央駅・西口八時集合である。私は三十分前に着いたのだが、市内に住む友人の方がなかなか来ず、心配していると滑り込みセーフでホツとした。「急に行かなくなかったと思ったわ」と、私が言うと、彼女は、「バスが込んでいて遅れたのよ」と汗を拭いていた。南九州高速道路経由なので途中、美山でトイレ休憩あり、薩摩川内で三号線に入る。市内も土曜のせいか、シャッターが閉まった店が

多く、寂れたなあと思うことだった。阿久根に入り、海が見えると、遠く甕島も眺めることができた。

黒の瀬戸に架けられた大橋も無料になり、交通量が増えたそうだ。旧東町側の道路を通るのだが、昔、私がスクーターで走っていた道路よりも上の方に、広い道路が整備されていて、初めての島に來た感じになった。私が住んでいた頃は、長島町と東町が同調できず、高校も本校と分校に別れたままだったが、現在はその高校も阿久根に併合されている。私が、初めて赴任する時、校長から、「東分校に行つて下さい」と言われ、私は本校の方がいいのと思ったのだが、当時の長島町には肉屋も無く、淋しい所だと判り、分校で良かったと思ったのだった。東町には鷹巣銀座があり、まだ橋は架かつていなかったが、住みやすい所だった。

長島の北端・薄井から乳之瀬橋を渡り、諸浦島から、天長フェリーに乗船、沖子島の片側港に渡る。二十分で着いた。桜島フェリーと同じで、バスに乗車したまま移動が出来た。昔は、夏休みの地区PTAに、小型船を雇って渡った島だったと思うと、近くの小島にも橋が架けられていて、便利になっているのに驚いた。

御所ノ浦にある「金比羅」で海鮮グルメの昼食となる。一行四十七名。大広間に、二列にテーブルが並べてあり、向かい合った四名で、組板に並べられた刺身を食べた。頭と尾で境を作り、四人前に切り分けてあり、遠慮せずに箸を伸ばすことができた。「採れたてで美味しいわね」友人と笑顔で話す。

刺身の他にも鯛と鰯の姿焼きがあり、野菜サラダ、胡瓜の酢の物、味噌汁、蛸の入った混ぜ御飯である。刺身の醤油で口の中が辛く

なっていたので、甘酢の胡瓜が美味しかった。「お腹一杯になったわね」テーブルの下に足を伸ばして寝転びたくなった。

二時間の食事時間を取っており、満腹になった客が退屈しないようにと、店の女主人は、甘夏蜜柑を剥いて出したり、インスタントコーヒーを出したりと、精一杯のサービスをしていた。もう動きたくないと、のんびり話している間に、溝辺から参加した女性たちは、近くの土手からツワ藪を沢山採ってきたので感心した。無料で土産が出来たのだ。時は金なりの見本だと思った。

獅子島の人口は八百人だそうで、店の近くにある獅子島小学校は、全員で十四名の児童とのこと。島を一周すると三十六キロである。島の反対側には幣串小学校があり、両校の児童は、片側港の上にある中学校に通学するのだ。この島では恐竜の顎骨が発掘されたので、

同時に出たアンモナイトと恐竜のミニユメントが、港に展示してあった。友人と並び、記念写真を書いて貰う。

十四時の船で長島に戻り、近くの針尾公園に寄る。展望台から雲仙天草国立公園の島々を眺め、眼下に広がる「薩摩松島」の景色を楽しんだ。「洒落た名前を付けた観光所だね」と、昔住んでいた時には無かった場所での保養ができた。

此処では「花の祭典」も開催されていてルーパーン、金魚草、パンジー、ポピーなどの花も綺麗に咲いていた。三十分後の集合に、またまた溝辺の方たちが、蕨を一握り採ってきたので、目の付け所が違うのだ。私には見えない山菜の場所が判る人たちに頭が下がる思いがした。「毎日、採りに行っているから」とは溝辺の人たちの言葉である。

長島での最後は、黒の瀬戸にある「だんだ

ん市場」での買い物だった。私は甘夏六個入った袋を二百円で求めた。友人は、島でしか販売していない芋焼酎「島美人」を購入していた。美味しいと噂のある酒らしい。「息子への土産よ」と言う、友人が羨ましい。

長島では二十一基の風車が建っていた。県内では一番だそうだ。私は大隅にも沢山動いていると思っていたので、長島の方が、風力発電にも力を入れていることが判った。今年特に、東日本の災害後、電力不足を心配しているので大いに助かることだろう。

島では馬鈴薯掘りが盛んだった。家族で掘った薯を集めていたが、小さい物は畝に捨ててある。マイカーで来たのなら、拾って帰るのにと行うことだった。蒸してバターをつけて食べたら、美味しいだろうと想像するだけで唾が出てくる。

四十数年前に三年間住んでいた島でのこと

を、思い出しながら帰途についた。一学期の終了式が終わると、日直以外の職員で釣りに出かけ、その獲物を料理して反省会をしたものだった。大きな蛸を土間に叩きつけて、塩で揉んで滑りをとってから茹でることも、その時教わった。削ぎ切りの稽古もしたが、上手には出来なかった。釣りをしたことのない私は一匹しか釣れなかったことまでも。

体育祭の前夜の大雨で、グラウンドに水溜りがあった時、生徒たちと雑巾かけをしたことも忘れられない。長島は赤土で水はけが悪く、水溜りの水を雑巾に吸わせては、バケツに絞ったのだった。その学校跡地には立派な町役場が建っていた。

島の周囲では真珠の養殖もしていて、真珠を採った後の貝柱の天麩羅を、主事が弁当のおかずを持って来ると、若い先生達が喜んで食べていた。

正月の新年式後には、主事宅で、祝い膳も出たので、手伝いをして、その時、なまこも覚えたのだった。懐かしい同僚の俵を目に浮かべながら、教え子たちは元気だろうか、現在は二名の生徒としか賀状の交流もないことを思い、自分が長生きしていることに感謝しつつ、鹿児島で友人と別れた。



式年遷宮に見る「共生と循環」



宮下 亮善

式年遷宮とは、伊勢神宮における二十年ごとに、内宮、外宮の本殿及びすべての末社などを新しく立て替える「皇室」のもっとも重要な祭りである。

その歴史を辿れば、六八五年《天武天皇十三年》に国家の制度として決定され、六九三年《持統天皇四年》に第一回の式年遷宮が行われた。一三二八年前のことである。今回で第六十二回目で、二〇一三年《平成天皇二十五年》に行われる。

この式年遷宮の意義はどのようなものでしょうか、考えてみたいと思います。《木々の緑

は年毎に新しく芽吹き、ひそかに枯葉を落とす。新宮は松の緑にひとしい、新緑ともいえる新宮を周期的に造営し、神の輝きを仰ぐ。それが、永遠の生命活動というものである。

他文献引用》

何故、今、式年遷宮なのか、現在世界中を席卷してやまない、アングロサクソン流グローバリズムの嵐は、行き過ぎた市場原理主義や株式至上主義を助長し、徹底した競争原理を押しつけ、富めるものはますます富み、貧しきものはますます貧しくなるという二極化を推し進める。まさに、統治分割する西欧合理主義の原理であり、他の神の存在を認めようとならない一神教的世界観がその行動指針となっている。ラビ・バトラ教授の言をかりれば、まさに搾取的資本主義が世界中を跋扈している。環境を破壊し資源を浪費し続けるならば、早晚、その資本主義そのものが破綻

するかも知れません。否、寧ろこのような文明は破綻したほうが良いかも知れない、世界中の二割のいわゆる先進国の人々が、八割の貧困者の上に成り立っている現状はどう見てもまともな姿ではない。自分さえ良ければ他の人はどうでも構わないという社会は、憎悪と憎しみを生む。イスラム原理主義の台頭も遠くは植民地支配の総括を怠ってきた西欧列強の怠慢であり、排他的一神教的世界の矛盾が露呈し、どうにも相手を抹殺しなければ収まらない様相を呈している。何せ、主要宗教の信徒数の内、三二％がキリスト教、一九％がイスラム教、〇・二％がユダヤ教、つまり世界の主要宗教の半数が、一神教を標榜する宗教に所属しているわけである。ハンチントン教授ならずとも「文明の衝突」が危惧されるわけです。

このようなか、一九八六年一〇月二十七

日教皇ヨハネパウロ二世が、イタリア、アツシジで、世界宗教者代表百名を招き「世界平和の祈り」を捧げ、多文化宗教という概念を提唱し、その地域の伝統、歴史、精神的なものの文化を取り組み、諸宗教間の対話と協力を要請するに至ったことは、それまでの西欧的価値観の限界を露呈したといえます。

今、まさに宗教を「文化」として捕捉する時代が到来したといえます。古来、日本人は自然の恵みを「カミ」として崇め、稲を「イノチノネ」として尊び、営々として自然と共に共生し命を育んできました。山も川も草も木も悉く仏になる神になる、このような世界に争いは生じません。

式年遷宮に込められた「共生と循環」の思想が、二十一世紀における東西文明の融合を図る指導理念として求められ、その文明史的使命を日本人は自覚し行動しなければならな

い。

秋が到来している。また、宮々として、この精神文化を維持し継続してきた皇室の祈りの意義をしっかりと理解し尊重しなければならぬと思います。

アメリカの建築家アントニオ・レイモンドは「環境と生活文化を両立させる新宮には、永遠の未来を約束する知恵とシステムが存在する。世界で一番古くて新しい」と絶賛している。

式年遷宮では、神殿の造営とともに装束や神宝のすべてを新調します。神殿の造営には、およそ三〇〇年前の木曽檜をご用材として使用し、伐採と同時に苗木を植林します。松や杉などの人口林は人の手で管理しなければなりませんので、結果として環境が維持されるわけです。解体されたご用材は全国の神社に下げ渡されたり、お守り札として再利用され、

装束などの服飾品五二五種で一〇八五点、神宝一八九種四九一点などを当代一流の職人や技術者により新調します。ここには、後継者の育成や伝統文化の維持発展が二十年毎に繰り返され、それが永遠に継続されていくシステムであるということです。勿論、五十鈴川に架かる「宇治橋」も架けかえられます。二十年毎に生まれかわる瑞々しい魂の蘇りの祭りであるということができます。式年遷宮に込められた「共生と循環」思想は、照葉樹林文化が育んだ先人の英知であり、人類の遺産でもあります。

啐啄坊亮善



戦中派世代の生き方を考える

中西 喜彦



十年後の変化に期待する理由とそれまでの養生について述べてみたい。

(二) 戦中派世代の過こした時代

筆者は支那事変の始まった昭和十二年に生まれ、昭和十六年の第二次世界大戦参戦時代を経て、昭和二十年（一九四五）の敗戦を小学校三年生で迎えました。この年の六月筆者は福岡市中央区で空襲を受け、がれきと死体の山に遭遇しました。取りあえず敗戦から二十年ごとに時代を区切ってこし方を思い出してみます。

二十年後の昭和四十年（一九六五）佐藤栄作首相が戦後初めて首相として沖繩を訪問しています。前年に東京オリンピック開催を成功させ、国鉄東海道新幹線が東京・大阪間を四時間で走っています。また、この年は筆者が鹿児島大学に赴任した年でもあります。昭

(一) はじめに

日本人の寿命が平成二十二年で女性八十六・四歳、男性七十九・六歳となった。日本人が七十五歳まで生きる割合は男性で七二・一％、女性八六・五％。九十五歳までは、男性八・〇％、女性三三・〇％。三大死因は（がん、心疾患、脳卒中）らしい。これで死亡する確立は男性で五四・〇％、女性で、五〇・九％で、ほぼ半分を占めると南日本新聞七月二十七日の一面で取り上げられた。わが「炉ばたセイ談」庵主入院重朝氏の二十年後を見てみたいと言う提言に賛同する筆者は、二

和四十三年（一九六八）は二十三年振りに小笠原諸島が日本に復帰しました。GNP（国民総生産）が四十二兆円に達し、西側世界第二位となり「昭和元祿」とも言われました。一方では、東京大学で学生が安田講堂を占拠し、卒業式が中止になる等全国的に学生運動が吹き荒れた時期でもありました。昭和四十五年（一九七〇）は大阪万博で日本が世界に文化面でも紹介され賑わいました。

さらに、四十年後の昭和六十年（一九八五）は中曽根内閣全員による靖国神社公式参拝が話題を呼びました。戦後三百六十円で固定されていた円が急騰し、二百円の大台を超えました。科学万博「つくば博 85」が開幕し、東京・両国に国技館が落成しました。

六十年後の平成十七年（二〇〇五）自民党は小泉純一郎首相のもと、総選挙で郵政民営化を旗印に衆院総選挙で与党（自民党、公明

党）の大勝を納めました。愛知万博（愛・地球博）開催の年でもあります。

その後、福田内閣、安倍内閣、麻生内閣と短期政権が続き四年後の平成二十一年（二〇〇九）衆院選で民主党が歴史的な大勝利を納め政権交代が行われました。民主党、国民新党および社会党による連立鳩山内閣が発足しました。ちなみにこの時の円相場はドバイショックで十四年振りに一ドル八十四円まで上りました。しかし、鳩山内閣も長続きせず、菅内閣に交代し現在に至っています。現在為替は一ドル八十円を割ってしまいました。

(三) 戦後の価値観とは

戦後の日本を説明するのに堺屋太一氏の提言は大変参考になります。まず、著書「大変な時代」で少子化、高齢化、情報化、国際化のキーワードで戦後の社会現象を説明してい

ます。さらに一昨年著書「凄惨時代」で、世界は全く新しい次元に入ったと述べています。知価革命なる概念を用いて、米英が知価社会化したのに対して、日本や中国、さらにアジア諸国は「物財の豊かなことが人間の幸せ」とする近代工業社会を完成させるに留まっていたとしています。米英では一九八〇年代から知価社会の「人間の幸せは満足の大きいこと」と考えるようになり、「欲しい時に買い、後で支払う」のが「利口な生き方」となった。この二つの価値観の違いが益々大きくなって製造者と使用者の國に別れ、両者間の経済摩擦となつています。

これを別の切口で表現すると、我々は、戦前の軍国主義への反省のもと、民主主義、自由、豊かさを旗印に、平等、個人主義、経済成長を押し進めて来ました。その結果、上下関係（家族関係）の崩壊、過度の競争、都市

集中となつていきます。さらに、農村は疲弊し、食料自給率は低下し、家庭崩壊、学級崩壊、いじめ、格差、無関心、老人の孤立、自殺と日本社会が崩れて行く感じがします。このような現状から我が国と他国との違いを考えてみましょう。

(四) 日本文明の特徴

本誌6号で筆者は文明比較の切口として牧畜民族と稲作民族で説明しました。今回は歴史的重層性について考えたいと思います。

現在先進国といわれる西欧諸国とは如何なるものでしょうか。十四世紀頃からスペイン、ポルトガルに始まる大航海時代からイタリヤ、仏、独、英国の産業革命、米国の独立に至っています。その後、第一次、第二次大戦を終え、冷戦を乗切った米国の超大国化となり現在に至って居ます。前述のように知価社会化

して、米国では究極のサブプライム・ローンで國の財政まで危うくなっています。

これらの國は日本の歴史で言えば室町時代以降に宗教戦争、民族戦争を繰返しながら少しずつ領土を固定しながら発展して来ています。

日本は周囲を海に囲まれた列島国家であるため民族移動は欧州のように陸続きでなく限られています。信長、秀吉、家康と強力政権が出来てからは領主の領土替えや参勤交代などによりかなりの支配層が集団で移動していません。その結果、大和朝廷成立以来現代まで共通の価値観を育成して来ています。既に、室町時代には日本文化の基礎は確立されたと考えて良く、江戸時代以降をみると政治的には強力なリーダーを育成していないように感じます。全体責任性（合議性）を重んじる伝統があります。司馬遼太郎流に言えば「くせ

のある人は排除されて来ました」。しかし、一度目標に合意が得られれば一人一人は非力でも粘土のように固まって行動します。一方、中国は四千年の歴史を持つとは言え多民族国家であり、王朝が変わると価値観も変わり、個人個人は力があっても砂のように固まらない。また、欧米も多民族国家であり、サラダボールのように中味が完全に一つになることはない。中味は多種多様でも建前だけは理想を高く掲げる強力なリーダーを必要とする。このようにしてみると他国では頼れるものは個人や血縁あるいは宗教以外の帰属集団はない。

これに対して、我が国では幕藩体制から現代に至るまで、合議体制を四百年以上維持している。その結果、帰属集団が職場であったり、地域だったり、学縁だったりする。血縁や宗教以外にも帰属意識が持てるようになって

ている。現在でも地方主権と言っている各県知事が判断の難しい重要案件には、國がと言ったり、地元民がと言ったりして自分の見解を述べず後だしジャンケンに徹する様に良く現れる。

今回の東日本大震災は戦後日本社会が築いて来た価値観を大きく揺さぶりました。いみじくも哲学者の梅原猛氏が今年一月に新哲学創造の理念として日本文化を形成する思想の本質は「草木国土悉皆成仏」と言う天台本学思想にまで立ち返るべきであると発表しています。

それは、自然環境破壊の原因として、「科学技術文明を理論づけたデカルト以来の近代哲学が間違っている」と警告しているのである。自我のある人間中心の世界。さらに神と人との世界観には限界があると言うのである。仏教では輪廻の考えで仏、人、動物までは世界

観に入ります。しかし、我が国では仏教伝来前に数千年以上前から続く縄文文化の影響を受けており、それが仏教伝来時の天台仏教の中で生かされていると指摘している。将に今回の大震災は、天罰、と言う例えが適切かどうかは別として、人間のみならず草木国土に仏性が有るように思われます。また、これは能の中でもっとも良く表現されているとも述べています。例えば、有名な能「高砂」では松の精が尉や媼の姿であらわれます。能「杜若」では花の精が歌人在原業平の姿で現れます。これは豊かな四季を持つとともに、天災にも晒され続けた日本列島の歴史を反映しているものと言えましょう。これを要約すると自然を征服するのではなく、自然と共生しながら生きる文化ではないでしょうか。

また、衆生本来無一物と言うように、人は裸で生まれ、裸で死んで行く。地位、名誉あ

るいは蓄財も夢幻の世界という仏教文化を今回の大震災は思いださせてくれました。

(五) 何歳まで生きるか。

巷に云われている温泉の暖簾等でみる『人生は六十歳から、七十歳にして、お迎えあれば留守と言え。八十歳にしてお迎えあれば、まだまだ早過ぎると言え。九十歳にしてお迎えあれば、そうせかずとも良いと言え。百歳でお迎え来るときは、時期を見てこちらからぼつぼつ行くと言え』とある。しかし、六十歳を過ぎると肉体と知情意が一致しない現象が現れ出す。これは一般的に六十歳定年と云われる時期を境に一応人としての子供の育成、社会維持の役から己にどう人生での落とし前を付けるかという境があると云う事であろう。さて、何処で手を打ったものでしょう。筆者にとって、冒頭の二十年後を見るには九十

五歳まで生きている必要がある。すなわち、それまで生きる確率は八%である。

その養生法について考えてみたい。

(六) 桜沢如一による養生論

健康に老後を過ごしたいと言うのは万民の希望するところである。冒頭の主な病気の種類はいわゆる生活習慣病と言うものである。これは個人の遺伝的な素質と食生活、睡眠、社会生活などの総合的なものである。すなわち、養生が必要というものである。

文芸春秋特別版「大養生、第81巻9号、二〇〇三」で桜沢如一の『宇宙の秩序』と養生論（石田英湾著）を紹介したい。石田氏はお米を正しく食べよう会を主宰しておられるが、日本の風土にあった食事が養生の基本と云う考えの方である。著者はその中で桜沢氏の健康の七大条件と云う指標を紹介している。

筆者はこれを日々実行することで何とか八%の生存率にかけたいと思うのである。

肉体の健康 (①絶対に疲れない、②ご飯がおいしい、③良く眠る)。精神の健康 (④物忘れをしない、⑤毎日が愉快でたまらない、⑥判断も行動も常にスマート)。心身総合 (⑦うそをつかない)

この七つの指標を毎日チェックして過ごす事が養生の基本と言う訳である。さらに最後の項目は神仏や真理に恥ずかしくない行いをしたかと言う事である。言い換えれば、生涯、真善美を追求すると言う生活態度である。

(七) おわりに

来年始めに後期高齢者になる。七十四年の歴史を振り返ると、終戦前後の苦労は酷かった。今でも慢性的空腹感と靴がなくて裸足で寒暑の激しいアスファルト道路の上を歩いた

感覚を思い出す。当時を考えると衣食住の心配の少ない今は天国に居るようなものである。前述のように民主主義と生活の豊かさを求めて、この約五十年を頑張つて来た。西欧世界に追いついてみると日米欧の国家は債務超過に陥り、明日の予測がつかない状況である。中国については吉本隆明氏が言うように約三十年遅れてついて来ている状況ではなからうか。ロシアについては未だ強権で押さえつける体制から抜け出していない。

それぞれの國の優劣を論じても余り意味は無い。日本文化を稲作文化の粹とすると欧米文化は牧畜文化の完成されたものと言えよう。前者が虫の眼を持つとすると、後者は鳥の眼を持っている。稲作においては個々の農家が細かい田んぼの手入れや収穫をおこなう。一方、牧畜には良い牧草地を求めての集団移動や家畜の群管理にはより臨機応変な対応が必

要である。これらのDNAが色々な事象に反映していると思われる。このような文明間の生存競争が今後どのようなものになるのか是非この動きを見てみたいものである。

もう一つの興味は世代間の価値観の違いである。戦中派世代の次は全共闘世代、ノンポリ世代と続く。戦後生まれの世代は戦争を経験しなかった。しかし、堺屋太一氏は今度の東日本大震災を、「第三の敗戦」と名付けている。戦後処理のお手並み拝見と言うところである。

時あたかも「日本中枢の崩壊」と言う告発書が現役経産省官僚によって講談社から出版された。現在の主役全共闘世代に対するノンポリ世代の反乱のようにも見える。いずれにせよ焼け野原を経験した世代としては内外の潮目の変化を注視し、健全なご隠居を目指したいものである。



貞子さんとコンピュータ



下土橋 渡

故入院貞子さんのお付き合いは、平成十八年四月二十九日に、一行の短いメールを頂いたことから始まりました。

何気なく自分の入来薪能を検索しましたら、素敵な写真が現れてびっくりしています。

入来院貞子

平成十四年から個人のホームページを開設して旅行記やレポートなどを掲載していた著者は、平成十七年八月二十七日に開催された第六回入来薪能を取材しホームページに載

せました。それをご覧頂き貞子さんからメールを頂いたのです。早速、お礼を兼ねて挨拶のメールを返信してメールのやり取りが始まりましたが、頂いた自己紹介のメール文のなかに、COBOL(コボル)、FORTRAN(フオートラン)というコンピュータの専門用語があつて驚いたのです。

早速にお返事有難うございました。船木は入来のすぐ近くですね。こんなお近くに、こんな方(コンピュータを専門にしている人)がいたなんて全然存知上げませんでした。もう百万の味方が出来たような心強い思いで居ります。私は大型のコンピュータでしたら得意でしたが(COBOL、FORTRANなど)、パソコンは始めたばかりです。

私は、一九七〇年三十六歳から富士電機株式会社東京工場の電算室に二十年ほど、もっ

ばら生産管理や在庫管理などのバッチシステムを担当して来ました。まだ八十欄カードの時代でした。QC（品質管理）の賞状が何枚もあります。五十五歳から六十歳まで全労済システムズで大型のIBMのマシンでデータベースのシステムを五年やりました。

（平成十八年四月二十九日のメール）

一九七〇年といえば、まだ計算尺が使われており、大学の研究室には機械式の手回し計算機が残っていた時代でしたが、大手企業では大型の汎用コンピュータが導入され、品質管理、資材在庫管理、生産管理、生産計画などのシステムが開発され始めたまさに黎明期でした。この時代に日本電算機総合学院でコンピュータを学ばれ実務に就かれた貞子さんは、まさしくわが国におけるSE（システムエ

ンジニア）の草分け的存在であり、二十三年という実務経験を持たれたベテランだったわけです。

今でこそパソコン教室は、一人に一台コンピュータが準備されていますが、当時は機材も少なく、ましてや大型コンピュータ時代です。当時の専門学校は、たくさんの人に入學してもらいたくさん入学金を納めてもらおうと、ついていけないほどの猛スピードで授業を進めたのだそうです。退学者がでるとそれだけ機材に余裕がでてくるわけです。そうして、貞子さんと一緒に無事卒業できたのは数名だったそうです。

コンピュータは、電圧がある値より高いときを1（ON）、低いときを0（OFF）と認識して動きます。したがって、1と0の組み合わせ、すなわち二進数の命令（プログラム）

を与えてコンピュータを動かすわけだが、1と0の羅列である機械語は人間には分かり難いので、英語ライクな高級言語が準備され、人間はまずこの高級言語でプログラムを記述します。それを機械語に翻訳し、標準関数という予め準備されているプログラムをリンクしてコンピュータが実行可能なプログラムを作ります。これを与えてコンピュータを動かすわけです。大型コンピュータのための高級言語が、COBOLやFORTRANなどで、前者は事務処理用、後者は科学技術計算用として使用されています。

コンピュータプログラマーになるためには、コンピュータの仕組みとともに先ずこのプログラム言語を習得する必要があります。プログラムが書けるようになって、次に上位職であるSEになるためには、品質管理、資材在庫管理、生産管理、生産計画といった仕事の

中身を理解し、SEになったら、効率良くどのようにコンピュータに仕事をさせるかを考えていかななくてはなりません。何枚もQC活動の賞状を頂かれた貞子さんは、効率的に仕事をさせるためのアイデアをたくさん考案されたに違いありません。

貞子さんとお付き合いさせて頂くようになり、入来花木会代表として入来薪能を主催されているにとどまらず、朝河貫一研究会理事・鹿児島市日中友好協会理事・文芸誌「火の鳥」「ゆうすげ」歌誌「にしき江」同人など、その多方面でのご活躍に驚かされることになったのですが、一方で貞子さんの頭の中には、二十三年の間に培われた、大型コンピュータシステムを動かすためのアルゴリズム（コンピュータに問題を解かせたり仕事をさせたりするための手順）やアイデアがいっぱい詰っているに違いないと思い、貞子さんの異才に

改めて驚くのでした。

貞子さんは、ホームページを開設し旅行記やレポートなどをアップしたりしている著者の活動の最も良き理解者でした。メールマガジンやホームページをご覧頂いた都度、貞子さんならではのコメントをメールで送って頂きました。

思い出もたくさんありますが、一番の思い出は、昭和四十五年の大阪万博でラオス館だった建物を、お父様の山崎良順師が払い下げてもらわれて移築され、世界平和を祈願する無宗派の寺院とされた昭和寺を、平成二十年六月二十九日諏訪市霧ヶ峰に訪ねたことでしょうか。

法要にご参加頂ける由、心から感謝申し上げます。(中略)夕方五時頃上諏訪駅にいらっしやれば、入来院の友人たちが着くので、迎

えに出ていますから、後を付いていらっしやればと思います。夜の一杯がみんなの楽しみですから、どうぞご一緒に。二十九日は午後二時には終わりますから、霧ヶ峰を十分撮って、蓼科あたりに一泊なさり、翌日、諏訪湖や諏訪大社を取材なさればと思います。茅野の友人に宿のこと相談してみます。八ヶ岳、蓼科山はいい被写体と思います。ご検討くださいませ。

(平成二十年四月三十日のメール)

お亡くなりになるまでの五年余りの間に貞子さんから頂いたメールは、三百二十九通にのぼります。お亡くなりになる五日前の四月二十七日に頂いたメールが最後のメールとなりました。会津若松の西郷頼母に触れたレポートのコメントとして頂いたメールでした。

菊池家について従弟に電話で聞きました。ルーツは山形県で、系図もあるそうですから、後で送ってもらいましょう。周防の木口城主だったからキグチが菊池になったのだろうというのですが、少弐の家臣だったというのです、少弐冬資は、今川了俊に菊池市で暗殺されます。私の歴史小説「痛恨」に詳しく書いてあります。ですから、少弐の家臣ということは、阿蘇の菊池に関係があると思われるのが、セピア色の写真で右端にたっているのが、菊池武之介。その横の二人はお手伝いさんです。また新しい発見がありそうです。

入来院貞子

改めて、入来院貞子さんのご冥福をお祈り申し上げます。



昭和寺本尊・三メートル金色像

陶工の仕事

十五代 沈壽官



八月十六日から三日間、白薩摩の原料調査を行った。白薩摩原料と一口で言うが、石の様に固いものから簡単に手で掴めるものまで様々ある。当然それぞれの果たす役割も異なる。人の体に例えて骨や筋肉や脂肪といったものを想像して頂きたい。

踏査したのは開聞町、笠沙町、霧島硫黄谷、入来町などいずれも藩政時代より白薩摩原料の産出地としてその名を知られた土地である。しかしながら、この三十年間程、鹿児島県内いずれの陶器工房も土の入手を県外の陶磁器原料屋に発注するようになり、県内のそれら原料産地はもはやその存在すら忘れられている。県外発注の理由は省力化に加えて原料の

枯渇である。

その様な状況の中、今回私が改めて現地調査並びに鉾山主との交渉に入ったのは自前の陶土、しかも鹿児島産の原料のみで造り上げた陶土をやはりどうしても開発する必要があるからである。

三年前、フランス国立セーブル美術館で開催された「パリ薩摩焼展」に於いてフランス側から提起された「薩摩焼の定義とは？」との問いかけは私に大きな問題意識を与えた。

従来は鹿児島県内で生産された焼物は大括りで薩摩焼と総称してきた。しかし、それでは伝統的工芸品も創作陶芸の同じカテゴリーに属してしまう。その分かりにくさが伝統産業としての白薩摩製造の衰退に拍車を掛けている事に気付いたのだ。

未来に一筋の光明を見出すには、どうすれば良いのか。その問いの答えは意匠や製造の

精度を増すだけでなく、焼物の原料そのものをよりローカルに仕上げていかなければならないという事であった。即ちローカルをより上質に磨き上げる事がオンリーワンである事に気付いた。

現実には山に入ってみると、三十年の歳月はあまりにも長く、鉱山の良質な部分は既に掘り尽され、更に製土に関する情報や人材もとうに失せていた。しかし、鉱山主の御好意により、完全に途絶えていたと思っていた製土への可能性がほんのわずかではあるが残されたのだ。それが、笠沙椎の木村の陶石と入来町のカオリナイトである。白薩摩焼の製造に不可欠なこの二大要素に可能性を見出した事は大変意義深く、今回の調査の大きな収穫であった。この細い糸を大切に、大切に紡いでいかなければならない。

焼物は一に土、二に焼、三に細工と言われ

る。

面白いことに焼物の原料になる様々な土は必ず温泉の近くに産出するのだ。つまり、陶器原料となる土は、特定の岩石が火山による地熱の影響を数億年規模で受ける事により変成したものである。われわれはその中で純良なものを選び、砕き、水簸を繰り返しながら更に不純物を除去。そして、細かな粒子を沈殿させる。そうして作られた幾つかの異なった性質の微細な原料を配合し、製作に向いた陶土に仕上げていくのである。やがて陶土で作られた物達は一二〇〇℃の高温で固く焼き上げられる。

つまり、地球が数億年を掛けて火山という窯で石を土に変えてくれた。そして、陶工はその土を窯という火山に入れる事で、再び土を石に変えるのである。陶工の仕事はそういう事である。

夢は叶うもの 思い強ければ

岩崎 好江



「いつか北海道で暮らしてみたい」という二十代からの夢を抱きつつ、デパートでの北海道展やテレビ番組や誌面で資料を作り、夢を膨らませて四十年間。七年前やっと念願叶い夢のバルーンのボックスに乗り今年も大空町女満別へ舞い降りました。

ここは道東網走の隣町、オホーツクブルー澄み切った大空の下、広大なビート畑や小豆畑は今緑の絨毯で、ジャガ芋畑は白やピンクの花が一面に咲き、刈入れ間近の秋蒔き小麦は黄金色の浪を打ってメルヘンの世界です。黒澤明監督の映画「夢シリーズ」の「カラス

の麦畑」の撮影場所となったオヴェールの丘は、ゴッホと縁の深いフランスのオヴェール地方の風景と酷似していると即決されたとか、近くの朝日展望台の周りには一面ヒマワリが咲き、ゴッホが自殺した七月二十七日にはギリシャ風の駅舎の前でワインとフランスパンのゴッホ祭が催されて花と音楽の素敵な町です。

一年だけのつもりが滞在してみると見る物、聴く事、食する物全て感動、感激の連続で北の大地の魅力にとりつかれ六年目の夏を過ごしてしまいました。長い冬の明けた北国の夏の催しものは、パワフルで興味深く、多くの講演もあり、先日は大野勝彦さんの講演で衝撃的な感動を受けました。

大野さんは熊本県在住の六十七才、平成九年四十五才の時トラックターで両手を切断し、義手で画に感じた事を詩や短い言葉にし、そ

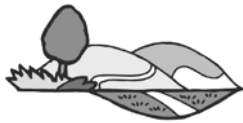
の一枚、一枚、それぞれが胸にズキンと響いてきます。肘から七センチと十三センチのところから切断するという、思出しても辛かった時代や、本当の強さを教えてくれた母の愛等、ユーモアを交えて笑顔ではなされました。

美術館を作りたい、美術館を作る、と口ぐせのように云い思い続けて十年。まさかの連続でありえない事が現実として形をなし夢が叶い、阿蘇に「丘の上大野美術館」が完成し、北海道にも富良野の近く、パッチワーク風の丘の町美瑛の閉校した小学校の跡地に、鹿児島出身の榎孝明さんと大野さんとの二人の美術館があります。

夢は叶うもの、理屈も何も無い、強く思うこと、諦めないことだと農業青年だった無骨な体つきと輝く瞳で語られると障害をバネに辛かった話も逆にパワーを戴き、熊本訛を北の地で聴く親密感と新鮮な感動を受けました。

顔に似合った人生が待っている笑顔・お金の使い処・時間の使い処・命の使い処にも共感し、ふと入来薪能の事が頭をよぎり入来の持つ歴史の品格、雰囲気がこの催しに最適と奮闘されて実現し、家計にも多大の影響もありながら七回も開催された入来院貞子様の心意気はまさに「夢は叶う、思い強ければ」に共通するものと改めて敬服しました。人生後半が面白い、味が出るのはこれからと私も北での魅力を充分満喫し、夢を夢のままにすることなく笑顔の日々をすごしたいと思います。

北の大地便り



編集後記・・・

本誌編集長だった故入来院貞子さんから、『そろそろ「炉ばたセイ談」の原稿催促をと思っていましたところ、桐野三郎会長よりご提案がございました。皆様「ここに送りたいです。』と、四月にお便りを頂きました。ところが、五月の二日にお亡くなりになったとの報に接し、吃驚仰天致しました。■一ヶ月ほどして重朝氏に「原稿ごうじましようか?」と恐る恐る伺ったら「貞子は賑やかなことが好きだったから、是非7号を発刊しましょう。それを着に皆で集まろう。それが自分の生き甲斐にもなる」と言ってくれました。■それから桐野三郎会長のご指導のもと、ごうじやは当初の予定に近い時期に発刊に漕ぎ着けました。皆様のご協力を厚くお礼申し上げます。■前述の桐野会長の「提案は三月の東日本大震災を受けて一人でも多くの方にその所感を寄せて欲しい」と言っただけでした。しかしながら今回の急な事態を受けて、最小限の貞子さんに関する弔辞、偲び文、最後の肉声として、「随筆かごしま」の最終寄稿文、鹿児島謡曲連合会報「風姿」5号での入来

新能の紹介、それに永年の文筆活動での作品リストを加える事にしました。毎号ごとの寄稿文も常連新人と賑やかになりました。■文集の作成にあたっては各種原稿の整理や配列は重朝氏と協議しながら中西喜彦が担当しました。文集のレイアウトやイラスト挿入および印刷所との折衝は下土橋渡が担当しました。■貞子さんの「別れ」は辛いけど、この文集で「再会」して、「炉ばたセイ談」を益々盛んにしたいものです。(中西 喜彦記)

「炉ばたセイ談」 第7号

炉ばたセイ談会会長

桐野三郎

編集担当

中西喜彦

下土橋渡

事務局〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

電話・ファックス 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成 23 年秋
第 7 号

〒899-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

灼ばたセイ談事務局